

2026 年 2 月

食料安全保障月報

(第 56 号)



令和 8 年 2 月 27 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2026年2月食料安全保障月報(第56号)

目次

概要編

I 2026年2月の主な動き	1
II 2026年2月の穀物等の国際価格の動向	4
III 2025/26年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV 2025/26年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V 今月の注目情報「アルゼンチンにおける穀物等の生産・輸出動向」	5

(資料)

1-1~3 穀物等の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較)	9
1-4 穀物等の国際価格の動向	12
1-5 サプライチェーン等に関する状況	13
2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	14
3 穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	15
4 加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	17
5 食品小売価格の動向	21
6 海外の畜産物の需給動向(ALIC提供)	22
7 FAO食料価格指数	23

今月のコラム

「我が国の食料政策において最も重要な国の一つ、カナダについて(その1)」	24
--------------------------------------	----

品目別需給編

I 穀物	
1 小麦	1
<米国> 2025/26年度の実産量は前年度から0.3%増加する見込み	
<カナダ> 2025/26年度の実産量は前年度から11.2%増加する見込み(AAFC)	
<豪州> 2025/26年度の実輸出量は前年度から14.2%増加する見込み(USDA)	
<EU27> 2025/26年度の実産量は前年度から20.0%増加する見込み(EC)	
<ロシア> 2025/26年度の実輸出量は前年度から2.3%増加する見込み	
<ウクライナ> 2025/26年度の実産量は前年度から1.7%減少する見込み	
<中国> 2025/26年度の実輸入量は前年度から43.9%増加する見込み	
2 とうもろこし	9
<米国> 2025/26年度の実産量は、前年度から14.3%増加する見込み	
<ブラジル> 2025/26年度の実産量は、前年度から3.7%減少する見込み	
<アルゼンチン> 2025/26年度の実産量は、前年度から6.0%増加する見込み	
<ウクライナ> 2025/26年度の実産量は、前年度から8.2%増加する見込み	
<中国> 2025/26年度の実産量は、前年度から2.1%増加する見込み	

3 コメ	1 5
<タイ>	2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%減少する見込み
<米国>	2025/26 年度の生産量は、前年度から 7.0%減少する見込み
<中国>	2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%増加する見込み
<インド>	2025/26 年度の生産量は、前年度から 1.3%増加する見込み
<ベトナム>	2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

II 油糧種子

大豆	2 1
<米国>	2025/26 年度の生産量は前年度から 2.6%減少する見込み
<ブラジル>	2025/26 年度の生産量は前年度から 5.0%増加する見込み
<カナダ>	2025/26 年度の生産量は前年度から 10.7%減少する見込み(AAFC)
<中国>	2025/26 年度の生産量は前年度から 1.2%増加する見込み
<アルゼンチン>	2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について(2025/26年度)	2 7
(参考2)単位換算表	2 7
(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)	2 8

【利用上の注意】

表紙写真:インドのウッタール・プラデシュ州の小麦。現在、生殖生長期を迎えている。
(撮影日:2026年1月25日)

(概要編)

I 2026年2月の主な動き

主要穀物等の生産量等について

2月の米国農務省(USDA)の需給報告によれば、2025/26年度の各品目の生産量等の状況は以下のとおり。

小麦の生産量は、アルゼンチン等で上方修正されたものの、トルコ等で下方修正され、前月から0.4百万トン下方修正された。前年度からは、イラン、パキスタン、シリア、イラク、トルコ等で減少するものの、EU、アルゼンチン、ロシア、インド、カナダ、豪州等で増加し、世界全体の生産量は841.8百万トンと史上最高となる見通し。

とうもろこしの生産量は、EUで上方修正されたものの、メキシコで下方修正され、前月から0.1百万トン下方修正された。前年度からは、ブラジル、EU、セルビア等で減少するものの、米国、中国、アルゼンチン、メキシコ、ウクライナ、ザンビア等で増加し、世界全体の生産量は1,295.9百万トンと史上最高となる見通し。

大豆の生産量は、ブラジル、パラグアイで上方修正され、前月から2.5百万トン上方修正された。前年度からは、米国、アルゼンチン、インド等で減少するものの、ブラジル、ロシア等で増加し、世界全体の生産量は428.2百万トンと前年度からわずかに増加する見通し。

期末在庫量は、とうもろこしは前年度から減少、小麦及び大豆は前年度から増加となっている。消費需要は引き続き旺盛であり、注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、主に乳製品、肉、砂糖の価格指数の下落が、穀物と植物油の上昇を相殺したこと等により、12月の124.3から、1月(最新値)は123.9と低下(参考:2025年1月124.7、2024年1月117.6、2023年1月131.4、2022年1月135.7、2021年1月113.5)。海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近5カ年の平均値と同程度の水準で推移。



写真:インド・西ベンガル州のコメの圃場。

生育は良好。

撮影日:2026年1月5日



写真:カナダ・マニトバ州の越冬中の冬小麦の圃場。スノーカバーに覆われている。

撮影日:2026年2月9日

ウクライナの生産・輸出動向

2月の USDA の需給報告によれば、2025/26 年度のウクライナの小麦の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が増加するものの、単収が減少することを受け、前年度から2%減少し 2,300 万トンとなる見込み。また、輸出量は、前月からの変更はなく、前年度から11%減少し 1,400 万トンとなる見込み。

2025/26 年度のとうもろこしの生産量は、前月からの変更はなく、収穫面積・単収が増加することを受け、前年度から8%増加し 2,900 万トンとなる見込み。また、輸出量は、前月予測から100 万トン下方修正されたものの、前年度から10%増加し 2,200 万トンとなる見込み。

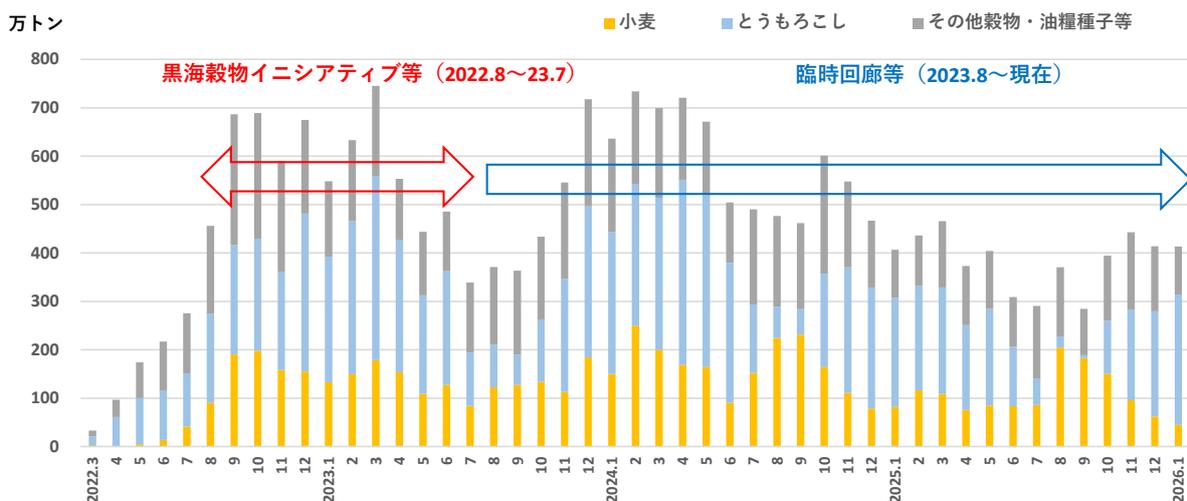
現地情報会社によれば、1月末現在、2026/27 年度の冬小麦は越冬期を迎えており、越冬の状況は概ね良好とみられる。また、1月 22 日現在、2025/26 年度のとうもろこしの収穫進捗率は 92%と収穫期の降雨により収穫が遅延している。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意(黒海穀物イニシアティブ)により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出等が行われているものの、ロシアによるウクライナの港湾インフラ等に対する攻撃が続いており、引き続き輸出動向について注視が必要。

(参考) ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022年3月～2026年1月)



出典:ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成
注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

1 ブラジル:2025/26 年度の大豆は記録的な生産量となる見込み

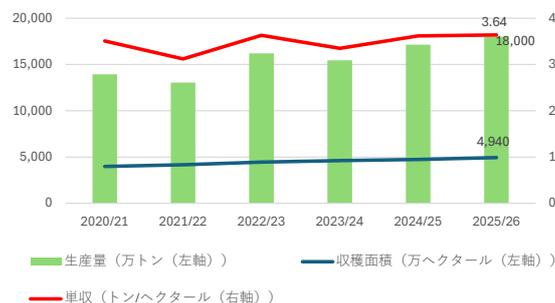
USDA によれば、2025/26 年度の大豆生産量は、前月予測から1%上方修正され、前年度から5%増、過去5年平均から19%増の1億8,000万トンと史上最高となる見込み。

これは、収穫面積は、前月予測から1%上方修正され、前年度から4%増、過去5年平均から12%増の4,940万ヘクタールとなるとともに、単収も、前月予測から1%増となり前年度からはわずかに増加、過去5年平均から6%増の3.64トン/ヘクタールとなることによる(図)。

生産地の大部分が収穫期を迎え、ほぼ全域で良好な作柄となっており、大半の州で平年を上回る単収となっている。さらに、最近の州別報告では、作付面積が当初の見込みを上回っている。

マツ・グロッソ・ド・スール州及びリオ・グランデ・ド・スール州では、近年、乾燥に見舞われ低単収となっていたが、今年度は豊富な降雨に恵まれ、前年と比べ作柄が著しく改善した。

図:ブラジルの大豆
生産量・収穫面積・単収の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

2 ブラジル:2025/26 年度のとうもろこしの生産量は平年並み

USDA によれば、2025/26 年度の大豆生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から4%減となるものの、過去5年平均からは10%増の1億3,100万トンとなる見込み。これは、収穫面積は前年度から1%増加、過去5年平均から5%増加し、過去最高の2,260万ヘクタールとなるものの、単収は前年度から5%減少、過去5年平均から6%増加し、5.80トン/ヘクタールとなることによる。

ブラジルのとうもろこしは第2期作(サフリーニャ)が年間生産量の75%以上を占めており、主にマツ・グロッソ州、マツ・グロッソ・ド・スール州、ゴイアス州といった中西部の州と南部のパラナ州で栽培されている。作付けは大豆収穫後の1月下旬から2月中旬に開始されるため、中西部における大豆の作付けや収穫の遅延は第2期作とうもろこしの作付けを遅らせ、生育期間の短縮、生産量の減少といった影響を与える。現在、マツ・グロッソ州における大豆の収穫進捗率は40%と、前年同期(29%)及び過去5年平均(26%)を大きく上回っている。この収穫ペースにより今後数週間で第2期とうもろこしの作付作業が加速し、十分な作付面積が確保され、雨季を通じて良好な生育が期待される。

3 パラグアイ:2025/26 年度の大豆生産量は好天に恵まれ増加となる見込み

USDA によれば、2025/26 年度の大豆生産量は、前月予測から5%上方修正され、前年度から13%増の1,150万トンと史上最高となる見込み。

これは、収穫面積は前月予測からの変更はないものの、前年度から1%増の380万ヘクタールとなるとともに、単収も前月予測から5%上方修正され、前年度から11%増の3.03トン/ヘクタールとなることによる。

パラグアイでは、大豆は通常10月から12月に作付けされるが、2025/26年度は例年より早期に作付けが行われ、生育が加速した。主要生産地の作柄は平年を上回り、前年度よりも良好となっている。生育期を通じた降雨が生育を支えており、当初の見込みを上回る単収が期待される。

II 2026年2月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1月末、190ドル/トン台後半で推移。2月に入り、世界的に潤沢な供給やドル高を受け190ドル/トン台半ばまで下落したものの、米中の貿易改善期待や堅調な輸出等を受け上昇し、2月中旬現在、200ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、1月末、160ドル/トン台後半で推移。2月に入り、中国による米国産大豆購入への期待から大豆に連れ高となったこと等を受け170ドル/トン台前半まで上昇したものの、世界的な天候改善等により160ドル/トン台後半まで下落。その後、米国産穀物への堅調な需要等を受け上昇し、2月中旬現在、170ドル/トン台前半で推移。

コメは、1月末、420ドル/トン台後半で推移。2月に入り、世界的な供給増及び需要の低迷等を受け下落し、2月中旬現在、420ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1月末、390ドル/トン台前半で推移。2月に入り、中国による米国産大豆購入への期待や米中関税停止の延長報道等を受け上昇し、2月中旬現在、410ドル/トン台後半で推移。

(注)小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2025/26年度の穀物需給(予測)のポイント

2月のUSDAの需給報告によれば、2025/26年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から4.2%増の29.74億トン。消費量は、前年度から2.9%増の29.59億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り26.6%となる見込み(P14資料2参照)。

生産量は、前年度から、小麦、とうもろこしは増加、コメは減少し、穀物全体では増加となり、29.74億トンの見込み。

消費量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、29.59億トンの見込み。

貿易量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、5.37億トンの見込み。

期末在庫量は、7.88億トンと前年度より増加するものの、期末在庫率は前年度より減少する見込み。

(注:数値は2月のUSDA「PS&D」による)

IV 2025/26年度の油糧種子需給(予測)のポイント

2月のUSDAの需給報告によれば、2025/26年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り6.96億トン。消費量も前年度を上回り6.88億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加し、期末在庫率も前年度をわずかに上回り21.2%となる見込み。

(注:数値は2月のUSDA「PS&D」による)

V 今月の注目情報:アルゼンチンにおける穀物等の生産・輸出動向

アルゼンチンは、南米でブラジルに次ぐ主要な穀物等の生産国、輸出国である。USDAによれば、2025/26年度において、小麦で過去最高の生産量となるなど好調な生産が見込まれている。

また、アルゼンチン政府は、2025年12月12日、穀物等の輸出税率の引下げを実施した。好調な生産による供給増と輸出税率の引下げを踏まえ、今後の見通し等をまとめた。

注: 文中の「2025/26年度」等は市場年度で、アルゼンチンにおける大豆の市場年度は2025年10月から2026年9月、小麦は2025年12月から2026年11月、とうもろこしは2026年3月から2027年2月。

1 世界全体から見たアルゼンチンのシェア

アルゼンチンは、南米においてブラジルに次ぐ主要な穀物等の生産国であるとともに、主要な輸出国でもある。USDAによれば、2025/26年度のアゼンチン大豆について、生産量、輸出量がそれぞれ世界第3位、とうもろこしは生産量が同5位、輸出量が同3位、小麦は生産量が同9位、輸出量が同6位となっている(図1)。

2 生産動向

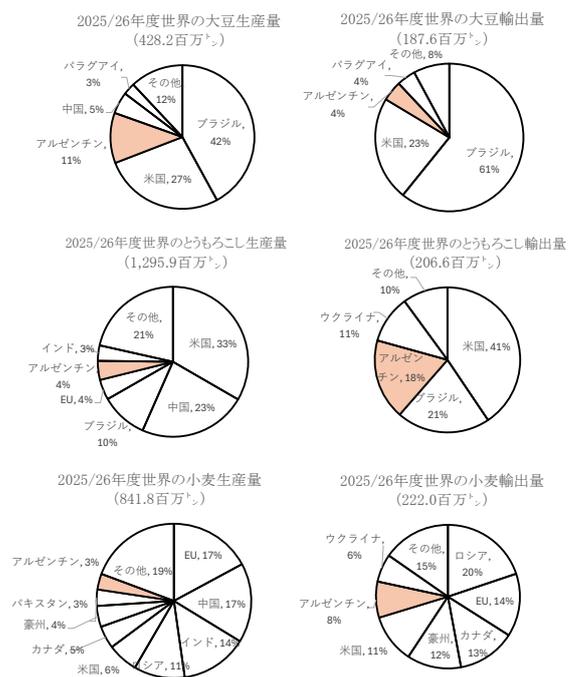
(1)大豆の生産動向

USDAによれば、2025/26年度大豆生産量は、前年度(51.1百万トン)から5.1%減となるものの、過去5年平均(42.9百万トン)から13.1%増の48.5百万トンとなる見込み(図2)。

2024/25年度は、病害虫のヨコバイの被害によりとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26年度は、被害の改善により大豆からとうもろこしに作付けがシフトした。この結果、収穫面積は、前年度(17.5百万ヘクタール)から5.5%減少し16.5百万ヘクタールとなり、単収が前年度(2.93トン/ヘクタール)からわずかに増加し2.94トン/ヘクタールとなるものの、生産量は減少する見込みとなった。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の月報(2026.1.22)によれば、2025/26年度の作付進捗率は98%とほぼ終了している。早植え大豆の生育段階は、7%が出芽期、46%が生長期、42%が開花期、5%が登熟期にある。作柄は、14%が非常に良好、79%が良好、7%が平年並みとなっている。遅植え大豆の生育段階は12%が出芽期、84%が生長期、4%が開花期にある。作柄は、10%が非常に良好、85%が良好、5%が平年並みとなっている。

図1 アルゼンチンの生産量・輸出量のシェア(2025/26年度)



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

図2 アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

(2)とうもろこしの生産動向

USDA によれば、2025/26 年度のとうもろこし生産量は、前年度(50.0 百万トン)から6.0%増、過去5年平均(49.1 百万トン)から7.9%増の53.0 百万トンとなり史上4番目となる見込み(図2)。

2024/25 年度はとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は大豆からとうもろこしに作付けがシフトした。この結果、収穫面積は、前年度(6.9 百万ヘクタール)から8.7%増加し7.5 百万ヘクタールとなり、単収が前年度(7.25 トン/ヘクタール)から2.5%減の7.07 トン/ヘクタールとなるものの、生産量は増加する見込みとなった。

SAGyP の月報(2026.1.22)によれば、2025/26 年度の作付進捗率は95%と最終段階を迎えている。生育段階は、53%が出芽期～生長期、19%が開花期、28%が登熟期にある。作柄は、約12%が非常に良好、79%が良好、6%が平年並み、3%が不良となっている。

(3)小麦の生産動向

USDA によれば、2025/26 年度の小麦生産量は、前年度(18.5 百万トン)から50.2%増、過去5年平均(17.3 百万トン)から60.3%増の27.8 百万トンとなり史上最高となる見込み(図2)。

収穫面積が、前年度(6.3 百万ヘクタール)から2.5%増加し6.5 百万ヘクタールとなるとともに、平年に比べ冬期に降雨が多かったことや先進的な種子の導入により、単収が前年度(2.92 トン/ヘクタール)から46.6%増、過去5年平均(2.84 トン/ヘクタール)からも50.9%増の4.28 トン/ヘクタールと史上最高を記録することによる。

SAGyP の月報(2026.1.22)によれば、2025/26 年度の収穫は終了しており、生産量は USDA と同様に27.8 百万トンの見込み。また、品質は、単収が高い際にみられるように、たんぱく質含有量が低くなっている。

同「Grain and Feed Update」(2026.1.23)によれば、2025/26 年度産小麦の大部分が飼料用に分類されており、当該小麦の輸入国は、米国やロシア等の高品質小麦とブレンドし使用しているとみられる。

3 輸出動向

(1)輸出税の導入と税率の引下げ

USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、2002/03 年度以降、アルゼンチンは政府歳入増強とドル準備高の安定化を目的として、主要な穀物等に輸出税を課してきた。輸出税は特に大豆及び大豆関連製品の税率が高くなっており、総輸出税収入に占める割合も大きくなっている。また、小麦やとうもろこしも大きな影響を受けており、輸出業者は税負担を相殺するため生産者への支払価格を引き下げることが多く、農家の収入を圧迫している。

写真 サンタフェ州コレア村の登熟期を迎えた大豆
(1月31日撮影)



写真 サンタフェ州コレア村の成熟期を迎えたとうもろこし
(1月31日撮影)



2015/16 年度に輸出税率をゼロとした際には、穀物生産量が大幅に増加し、2016/17 年度の輸出量が 400 万トン以上増加することとなった。

2025 年 12 月 9 日には、アルゼンチン政府は農産物等に対する輸出税率の恒久的な引下げを発表し、12 月 12 日に公布された官報(政令 877/2025 号)により輸出税率の引下げが行われた。これは、アルゼンチンにおける長期的な政策の転換となるものであり、主要な穀物等の税率は、小麦及び大麦は 9.5%から 7.5%に、とうもろこし及びソルガムは 9.5%から 8.5%に、大豆は 26%から 24%に、大豆油及び大豆粕は 24.5%から 22.5%にそれぞれ引き下げられた(表1)。

(2)輸出動向

①大豆の輸出動向

USDA によれば、2025/26 年度の大豆輸出量は、前年度(7.9 百万トン)から 4.8%増、過去5年平均(5.0 百万トン)から 63.5%増の 8.3 百万トンとなる見込み(図3)。

アルゼンチン国家統計局(INDEC)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10~12 月の大豆輸出量は、前年同期(25.0 万トン)と比べ 1,798.5%増の 474.2 万トン。輸出先国別には、中国 467.0 万トン(98.5%)、チリ 1.3 万トン(0.3%)、米国 0.8 万トン(0.2%)の順(※その他には秘匿「Confidential」含む。以下とうもろこし及び小麦において同じ。)となっている(表2)。前年同期に比べ輸出量が大きく増加しているが、これは、2025 年9月に輸出税を一時的に撤廃した際に中国が多く大豆を購入したことによる。

② とうもろこしの輸出動向

USDA によれば、2025/26 年度のとうもろこし輸出量は、前年度(29.5 百万トン)から 25.4%増、過去5年平均(33.3 百万トン)から 11.0%増の 37.0 百万トンとなり史上3番目となる見込み(図3)。

INDEC によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3~12 月のとうもろこし輸出量は、前年同期(3,113.3 万トン)と比べ 15.9%減の 2,619.7 万トン。輸出先国別には、ベトナム 481.0 万トン(18.4%)、ペルー 401.0 万トン(15.3%)、マレーシア 275.7 万トン(10.5%)の順となっている(表3)。USDA「Grain:

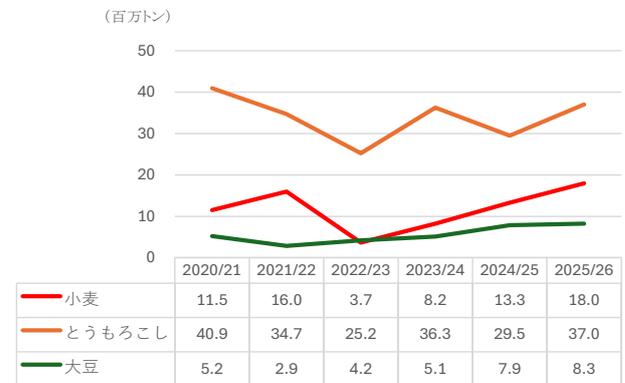
表1 アルゼンチンにおける近年の輸出税率の推移

(単位:%)

政令	公布日	小麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日(※)	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5

※9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。

図3 アルゼンチンの小麦、とうもろこし、大豆輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表2 アルゼンチンの大豆輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年10月~2024年9月)		2024/25年度 (2024年10月~2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月~12月)		2025/26年度 (2025年10月~12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	461.2	90.4	中国	681.4	86.6	チリ	2.6	10.6
米国	11.5	2.3	米国	15.9	2.0	米国	2.4	9.8
チリ	4.8	0.9	イラク	11.2	1.4	その他	19.9	79.6
ペルー	2.1	0.4	チリ	9.0	1.1			
その他	30.6	6.0	カナダ	1.9	0.2			
			その他	67.2	8.5			
計	510.3	100.0	計	786.6	100.0	計	25.0	100.0
						計	474.2	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)のデータをもとに農林水産省で作成。なお、その他には秘匿「Confidential」の数量を含む。

表3 アルゼンチンのとうもろこし輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年3月~2024年2月)		2023/24年度 (2024年3月~2025年2月)		2023/24年度 (2024年3月~12月)		2024/25年度 (2025年3月~12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベトナム	370.2	14.7	ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	609.0	19.6
ペルー	316.5	12.5	ペルー	433.1	11.9	ペルー	374.9	12.0
アルジェリア	275.5	10.9	マレーシア	333.6	9.2	マレーシア	283.4	9.1
マレーシア	230.5	9.1	韓国	282.2	7.8	韓国	282.2	9.1
韓国	204.7	8.1	アルジェリア	280.1	7.7	サウジアラビア	226.4	7.3
その他	1,126.1	44.6	その他	1,628.2	44.9	その他	1,337.4	43.0
計	2,523.4	100.0	計	3,624.9	100.0	計	3,113.3	100.0
						計	2,619.7	100.0

資料:同上。

World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、2024/25 年度の輸出量は、輸出税の引下げはあったものの、米国やブラジルとの競争により伸び悩んだ。

③ 小麦の輸出動向

USDA によれば、2025/26 年度の小麦輸出量は、前年度(13.3 百万トン)から 35.3%増、過去5年平均(10.5 百万トン)から 70.7%増の 18.0 百万トンとなり史上最高となる見込み(図3)。

INDEC によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 12 月の小麦輸出量は、前年同期(129.6 万トン)と比べ 127.3%増の 294.8 万トン。輸出先国別には、バングラデシュ 62.3 万トン(21.1%)、インドネシア 51.1 万トン(17.3%)、ベトナム 49.9 万トン(16.9%)の順となっている(表4)。

表4 アルゼンチンの小麦輸出量と輸出先国

2023/24年度 (2023年12月～2024年11月)			2024/25年度 (2024年12月～2025年11月)			2024/25年度 (2024年12月)			2025/26年度 (2025年12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	448.5	55.7	ブラジル	566.2	43.2	ブラジル	54.3	41.9	バングラデシュ	62.3	21.1
インドネシア	134.6	16.7	インドネシア	128.7	9.8	インドネシア	23.3	18.0	インドネシア	51.1	17.3
ペルー	26.1	3.2	アンゴラ	59.3	4.5	バングラデシュ	7.0	5.4	ベトナム	49.9	16.9
ケニア	16.0	2.0	バングラデシュ	54.6	4.2	モルタニア	6.6	5.1	ブラジル	37.8	12.8
エクアドル	10.1	1.3	チリ	48.5	3.7	ペルー	6.4	5.0	モロッコ	17.4	5.9
その他	169.6	21.1	その他	452.8	34.6	その他	32.0	24.7	その他	76.2	25.9
計	804.8	100.0	計	1,310.1	100.0	計	129.6	100.0	計	294.8	100.0

資料:同上。

USDA「Grain and Feed Update」(2026.1.23)によれば、2025 年 12 月、アルゼンチンは約 30 年ぶりに約 16 万トンの製粉用小麦を中国に輸出した。これは、2024 年1月に中国がアルゼンチン産小麦の輸入を再認可したことを受けたもの(なお、INDEC の 2025 年 12 月のデータでは中国向けはゼロとなっており、秘匿「Confidential」に含まれているものとみられる。)。また、2025/26 年度におけるアルゼンチン産小麦の主要輸出先は、インドネシア、バングラデシュ、ベトナム、モロッコ、アンゴラ、タイ、チリで、ブラジルはアルゼンチン産小麦の品質が悪い(豊作によるたんぱく質含有量の低下)ことから減少が見込まれる。

4 今後の見通し

アルゼンチンの 2025/26 年度の穀物等の生産量は、小麦で過去最高となるなど好調な生産が見込まれている。また、同国での輸出税の引下げは、生産者の収益を向上させ、生産に対するインセンティブになり、また、価格競争力を向上させ輸出量の増加に働くとみられる。

一方で、生産については、ラニーニャ現象の影響を強く受ける傾向があり、2022/23 年には 60 年に一度といわれる干ばつに見舞われ穀物等の生産量が大きく減少するなど、天候に大きく左右される。また、輸出については、同国の政策動向や生産量、国際市場の状況のほか、米中の貿易動向にも大きく左右されるとみられ、直近の米中貿易摩擦時には、中国はアルゼンチンを含む米国以外の国から穀物等の輸入を増加させている。

アルゼンチンの農家等は、輸出税の更なる引下げを期待しており、今後の輸出税の動向や気象状況、米中の貿易動向等について、引き続き注視していきたい。

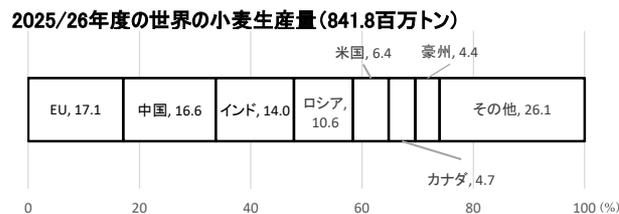
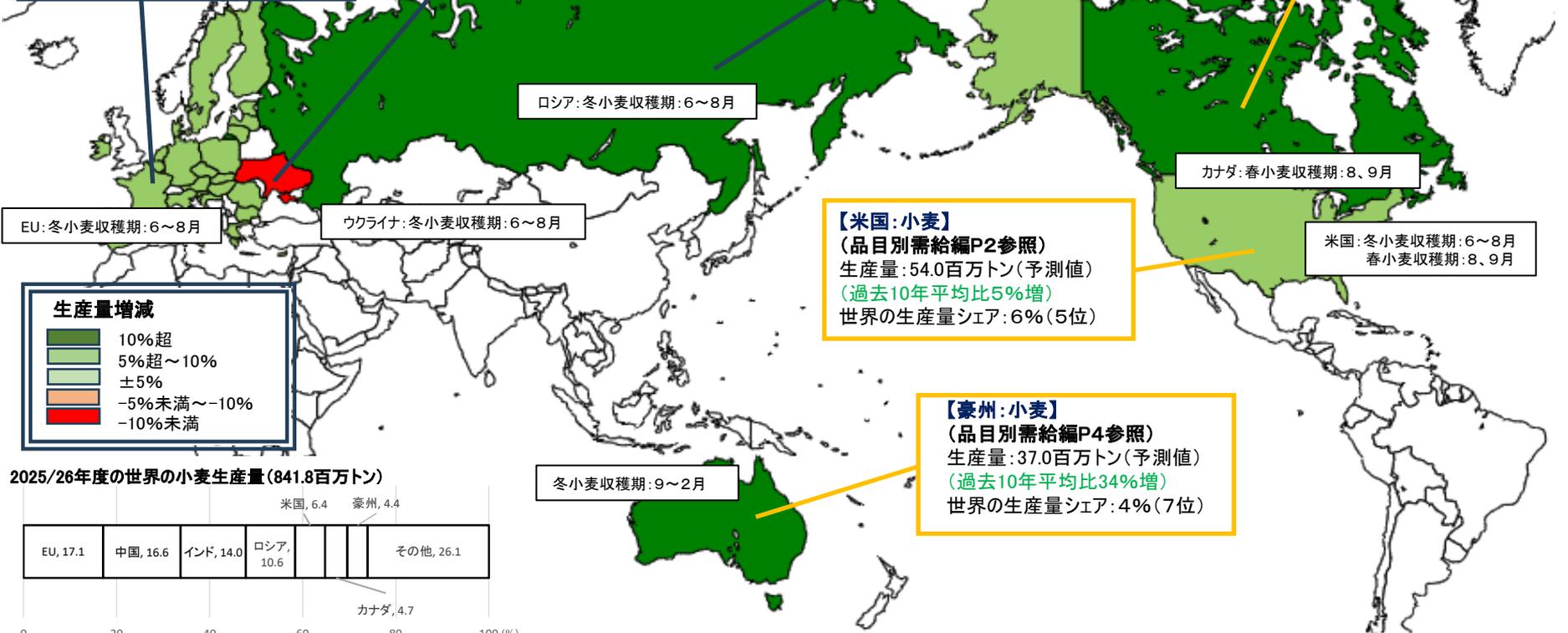
資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(2月版)

【EU:小麦】(品目別需給編P5参照)
 生産量:144.0百万トン(予測値)
 (過去10年平均比7%増)
 世界の生産量シェア:17%(1位)

【ウクライナ:小麦】(品目別需給編P7参照)
 生産量:23.0百万トン(予測値)
 (過去10年平均比12%減)
 世界の生産量シェア:3%(10位)

【ロシア:小麦】(品目別需給編P6参照)
 生産量:89.5百万トン(予測値)
 (過去10年平均比13%増)
 世界の生産量シェア:11%(4位)

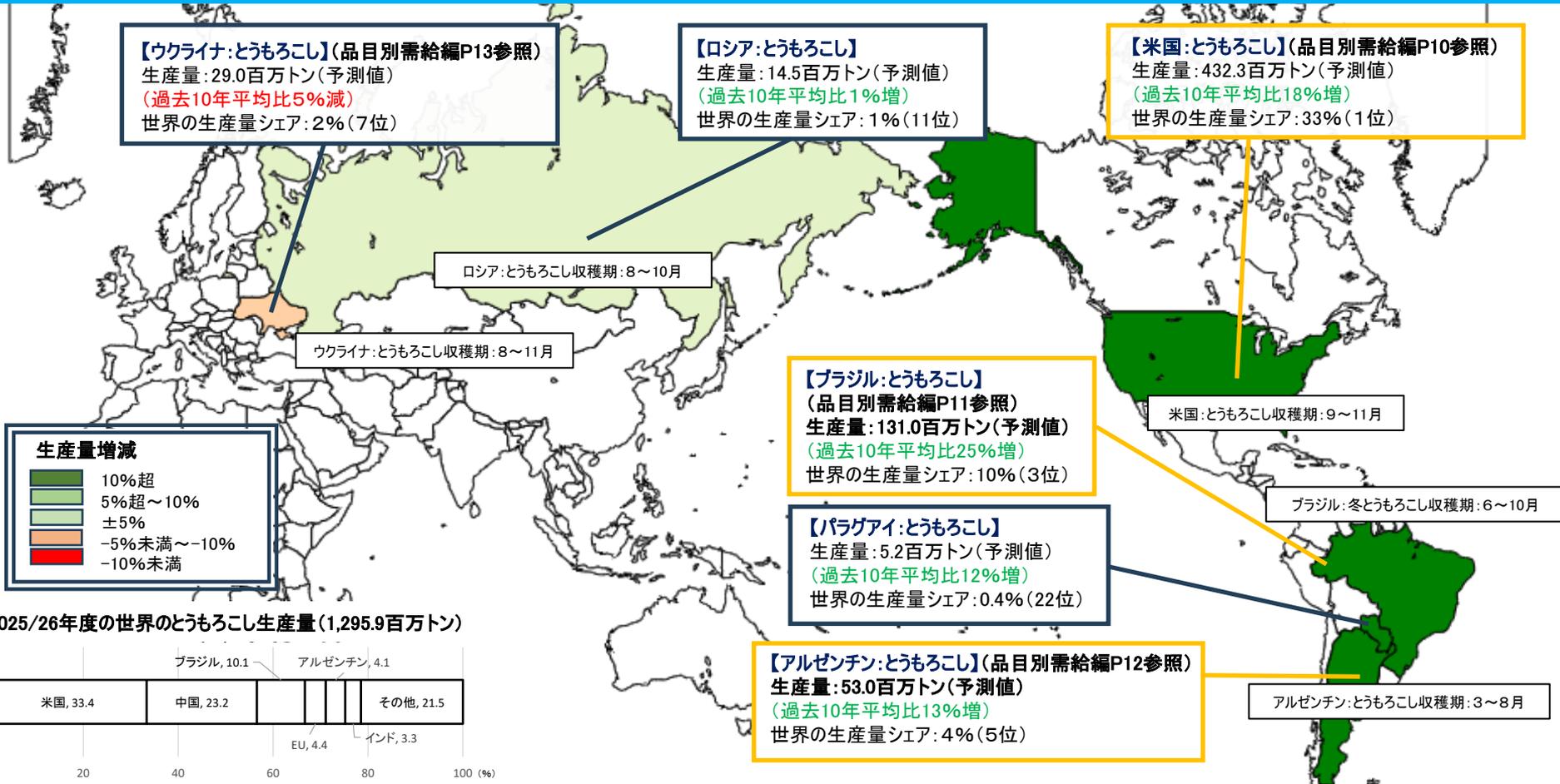
【カナダ:小麦】(品目別需給編P3参照)
 生産量:40.0百万トン(予測値)
 (過去10年平均比26%増)
 世界の生産量シェア:5%(6位)



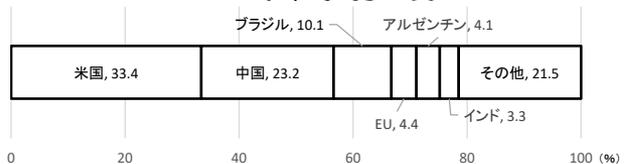
○ 2024年度の日本の小麦輸入量は533万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(650万トン、うち食用は512万トン)の82.0%を占める。
 ○ 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は256kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の11.4%を占める(2024年度)。

出典:USDA「PS&D」(2026.2)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(2月版)



2025/26年度の世界のとうもろこし生産量(1,295.9百万トン)



2025/26年度の世界のとうもろこし輸出量(206.6百万トン)



2025/26年度の世界のとうもろこし輸入量(192.1百万トン)



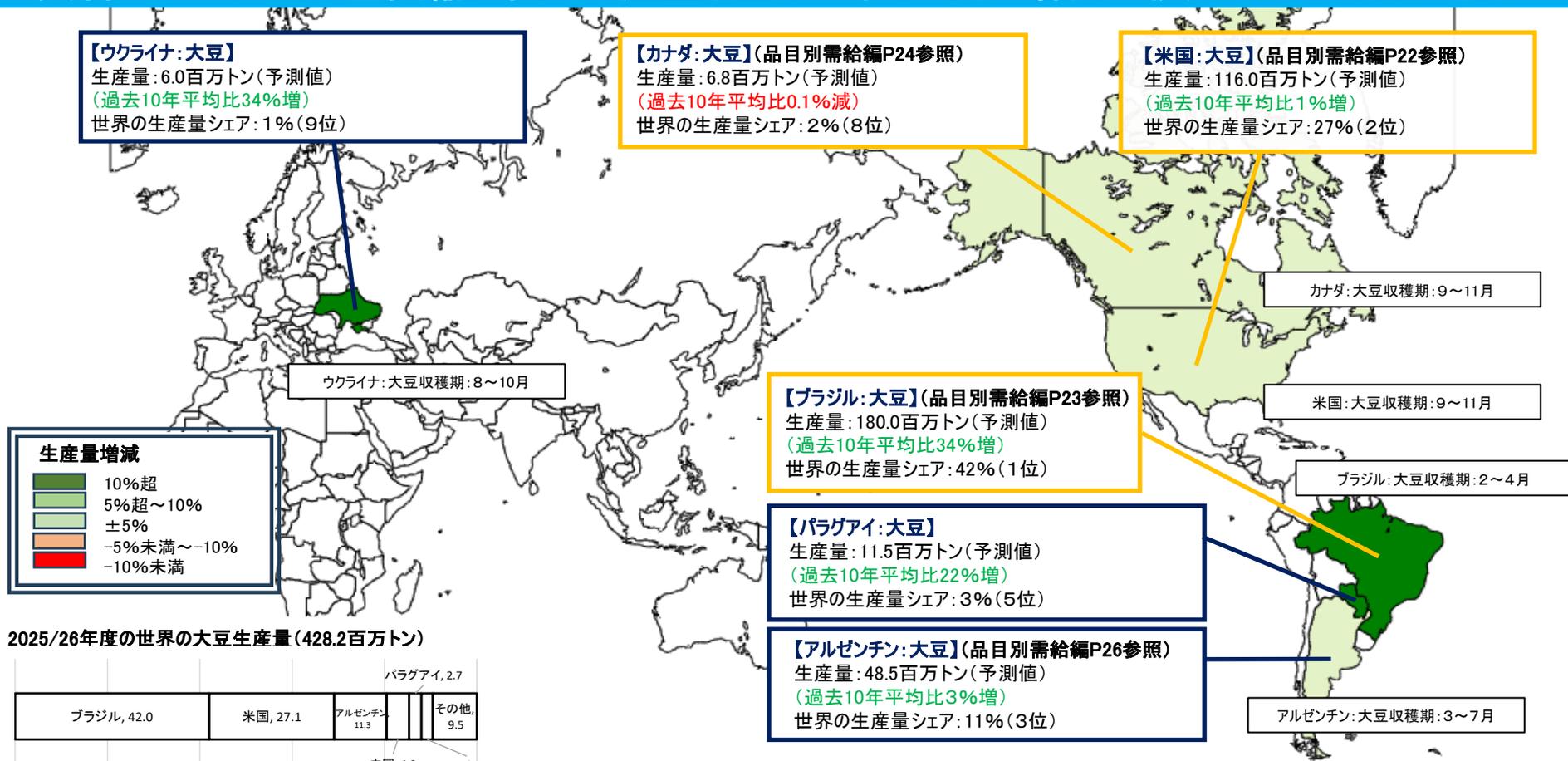
2024年の日本のとうもろこし輸入量(15.3百万トン)



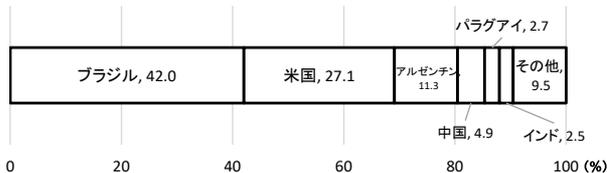
○ 2024年度の日本のとうもろこし輸入量は1,522万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,518万トン、うち飼料用は1,194万トン)のほぼ全量を占める。

出典:USDA「PS&D」(2026.2)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(2月版)



2025/26年度の世界の大豆生産量(428.2百万トン)



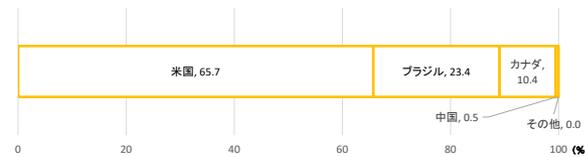
2025/26年度の世界の大豆輸出量(187.6百万トン)



2025/26年度の世界の大豆輸入量(186.0百万トン)



2024年の日本の大豆輸入量(3.17百万トン)



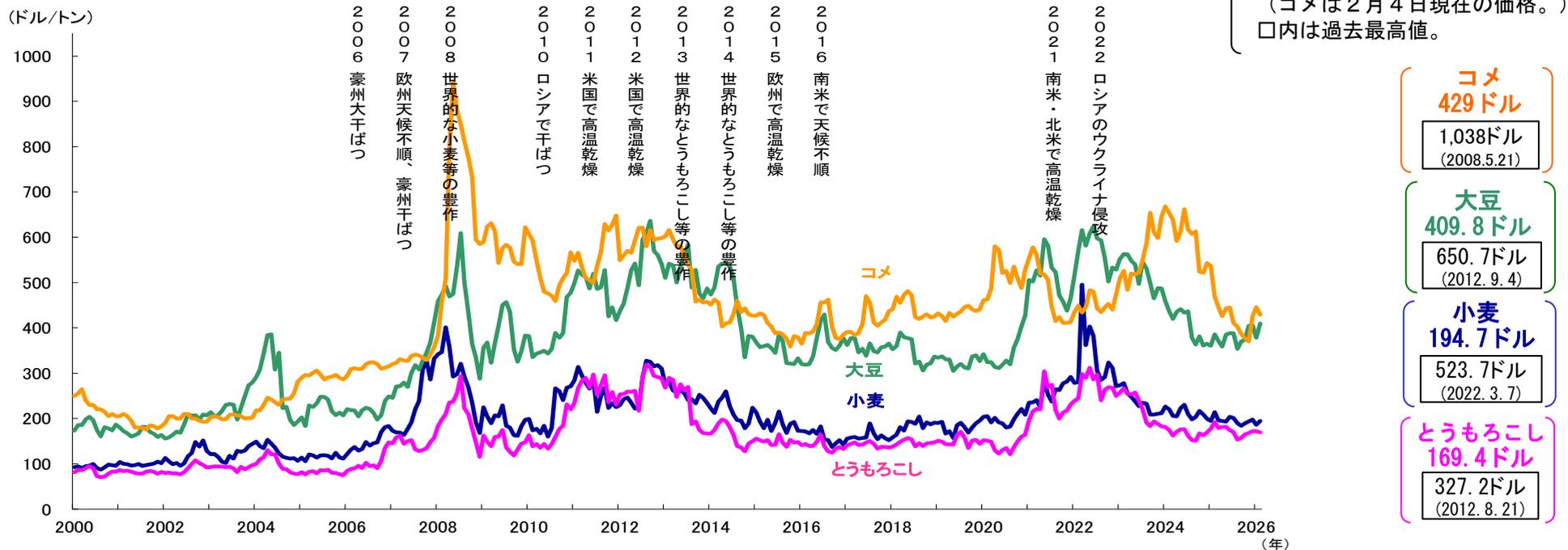
○ 2024年度の日本の大豆輸入量は309万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(359万トン、うち大豆油などの加工用は256万トン、食用は88万トン)の86.2%を占める。
○ 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は58kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の2.6%を占める(2024年度)。

出典:USDA「PS&D」(2026.2)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料 1-4 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。2025年11月以降、タイの洪水被害、タイ政府のコメ政策管理委員会の政策措置（市場価格を超える価格での余剰米の買い上げ等）等を受け上昇するも、世界的な供給増等を受け、再び下落。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料 1-5 サプライチェーン等に関する状況

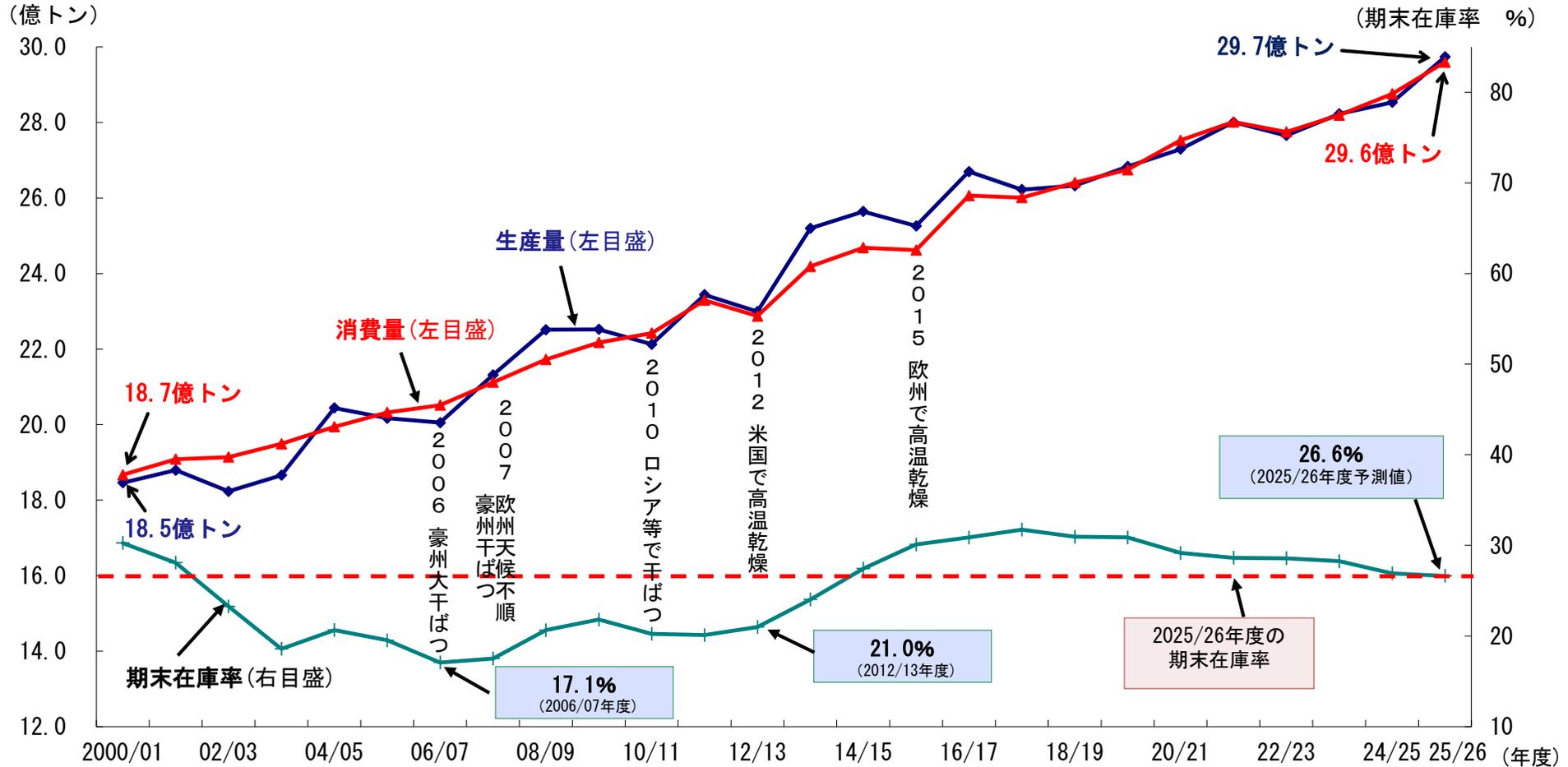
○サプライチェーン等に大きな影響を与える情報は特段なし (2026年1月27日時点)

生産国の情報	チョークポイント情報	その他
<p>○米国 2026年に入り、米国の穀物輸送における鉄道の需要が高まっている。Class I 鉄道(北米の主要幹線鉄道)の穀物積載貨物の本数は前年比26%増でシャトル車の入札額も上昇。</p> <p>○ブラジル ①ブラジル開発銀行は、Rumo Logistica社のマトグロソ州鉄道建設を支援するために20億レアルの債権発行を承認した。同鉄道は「ロンドノポリス」-「クイアバ」-「ノヴァ・ムトゥム」-「ルーカス・ドリオ・ヴェルデ」を結ぶ 743kmの穀物輸送鉄道。 ②1月26日現在、アマゾン川の航行に関し影響を与える情報なし。流量は一部地点で洪水警戒レベルを超えているものの、その他の監視ポイントでは「普通」。</p> <p>○アルゼンチン ①ブエノスアイレス穀物取引所によれば、主要産地の1月の降雨が少ない見込みであり、降雨不足によるとうもろこし、大豆の収量減少が懸念される。他方、ロサリオ穀物取引所によれば、早期播種とうもろこしについて、生育への悪影響が指摘されているものの、収穫量は楽観的な見通しを出している。 ②1月27日の記事によれば、熱波と乾燥が続き、特にとうもろこし・大豆の収量が下方修正される可能性がある。早期播種とうもろこしは減収が確実視されており、農家からは穀粒の未成熟や生育不良が報告されている。</p> <p>○豪州 豪州政府は、メルボルン北部のBeveridgeに、豪州最大の物流ハブとなる複合一貫輸送地区の建設を開始。貨物コストの削減、道路渋滞の緩和、サプライチェーンの効率化と競争の促進が期待される。</p> <p>○マレーシア 2025年のパーム油輸出量は、インド、中国、EU向けを中心に輸出量が減少したことから、前年と比べ減少し1,526万トン。一方、2026年1月前半の輸出量は、国内在庫増と価格競争力の高まりにより前月比18~19%増。</p> <p>○インドネシア インドネシア政府は技術や資金の制約から2026年のバイオディーゼルB50(パーム油原料燃料50%)導入を延期し、現行のB40を維持すると発表した。パーム油の国内需要見通しも下方修正されパーム油価格の下落材料となり、マレーシアのパーム油在庫増も価格下落圧力となっている。</p>	<p>○パナマ運河 <u>パナマ運河の通航に関し特段問題なし</u>。12月のパナマ運河通航数は、1日平均34.6隻と、前月33.9隻と比べわずかに増加したが、前年同月35.0隻と比べわずかに減少。</p> <p>○スエズ運河 フーシ派による新たな威嚇映像の公開や米軍の中東地域への増派により、地域の緊張が高まり、海運のスエズ運河回帰は不透明。</p> <p>○バブ・エル・マンデブ海峡周辺 東イエメンのハドラマウト県とアル・マフラ県での緊張が紅海からアラビア海の地域安全保障の新たな懸念となっている。</p>	<p>○カナダ・中国関係 1月16日、カナダと中国は新たな戦略的パートナーシップを発表した。この中で中国はカナダ産菜種種子の関税を3月1日までに現在の84%から約15%に引下げ。</p> <p>○輸送コスト 2024/25年保険年度における高額請求の増加により、船主責任保険市場は不安定化し、2026年2月の更新で保険料の大幅な引き上げが避けられない状況。</p>

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2025/26年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2025/26年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回るものの、前年度より減少し、26.6%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

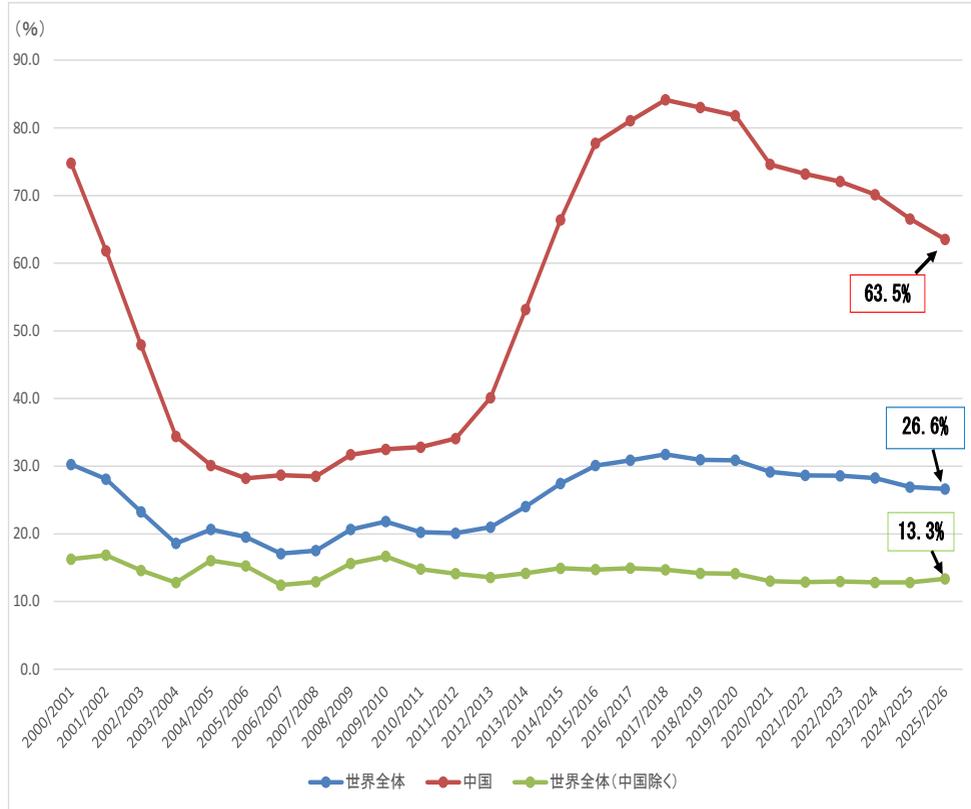


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2026)、「PS&D」

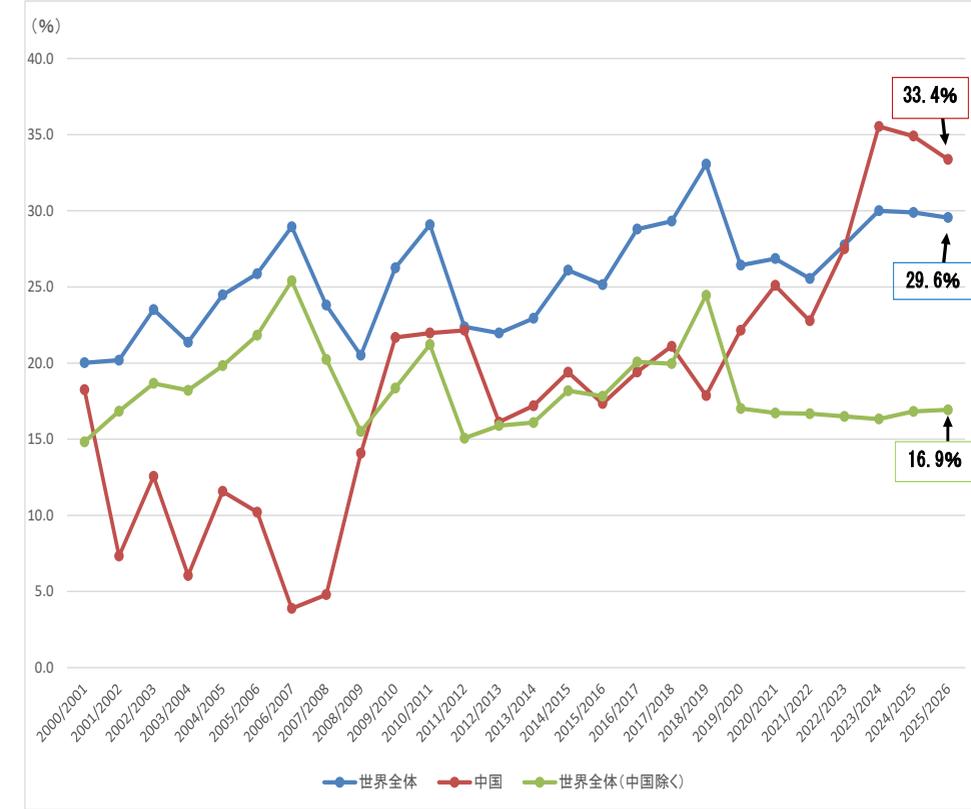
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移

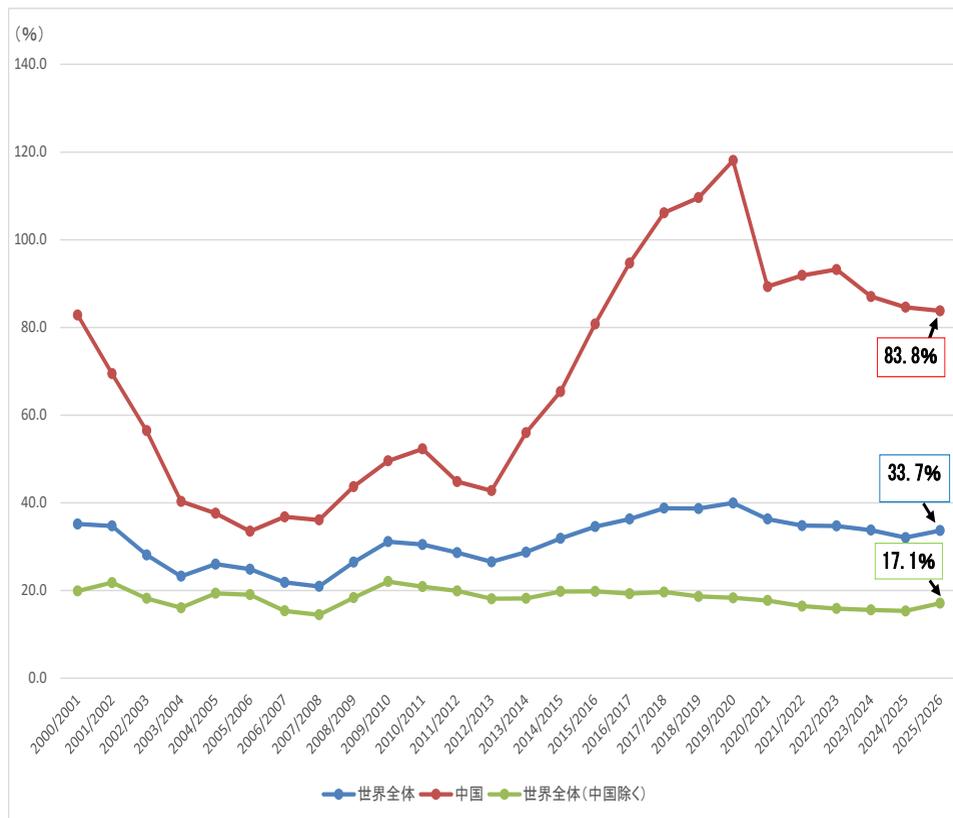


資料: 米国農務省「PS&D」(February 10, 2026)

- 注: 1)穀物はとうもろこし、小麦、コム等(大豆除く)。
- 2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100
- 3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100
- 4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 10, 2026)

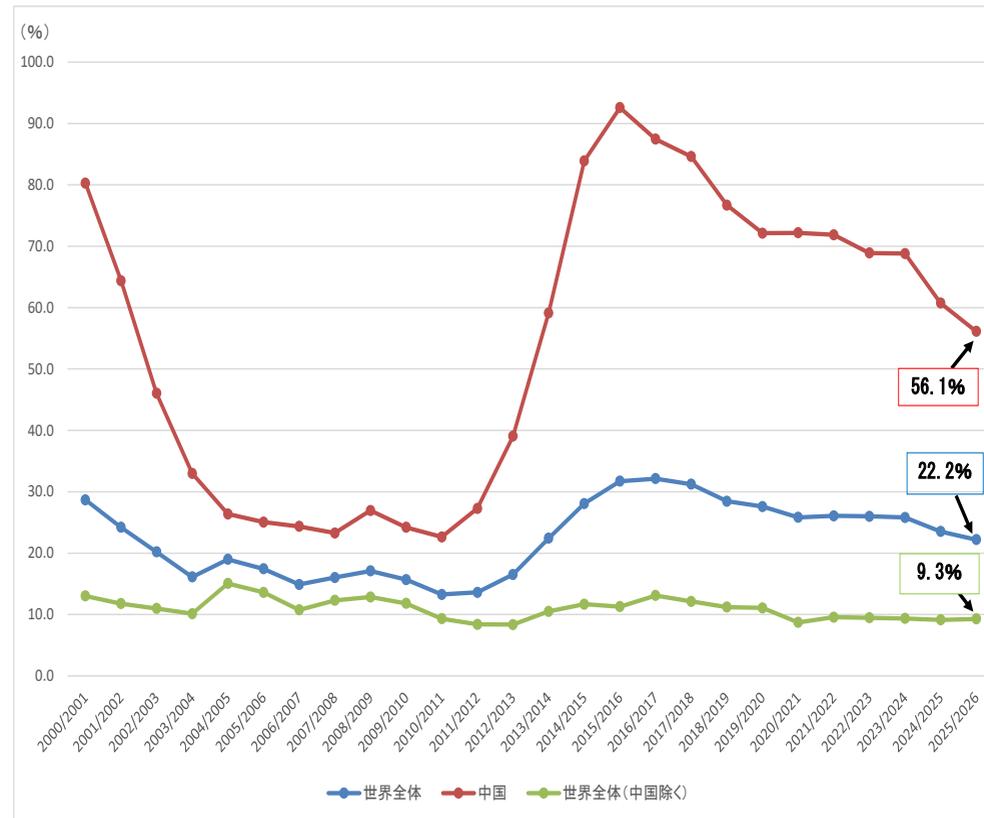
注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

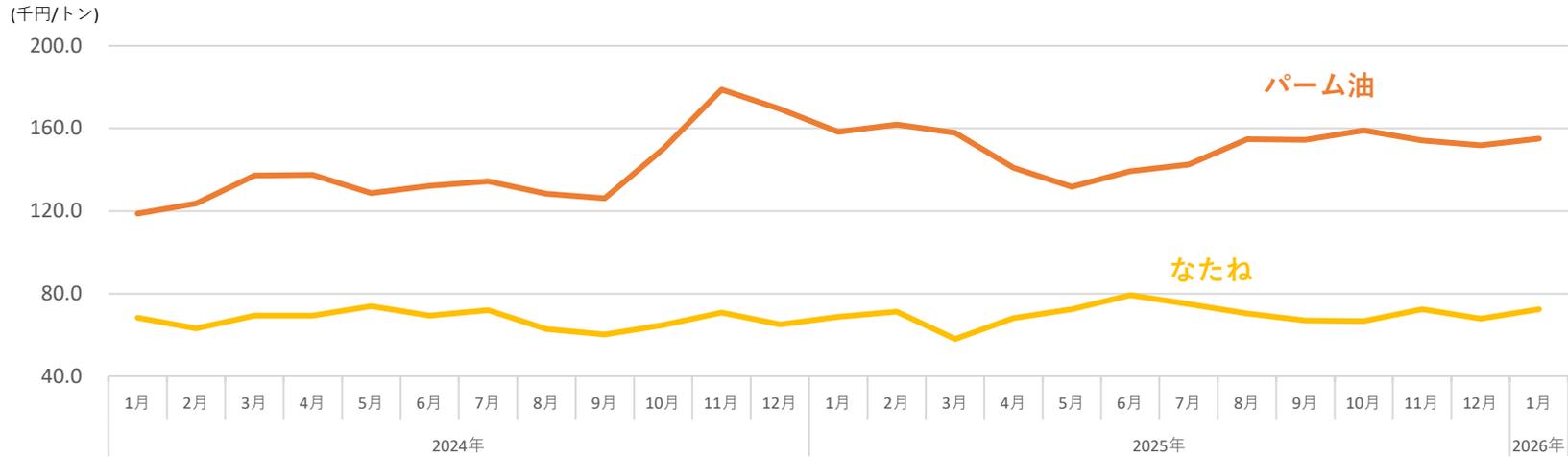
4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料 4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

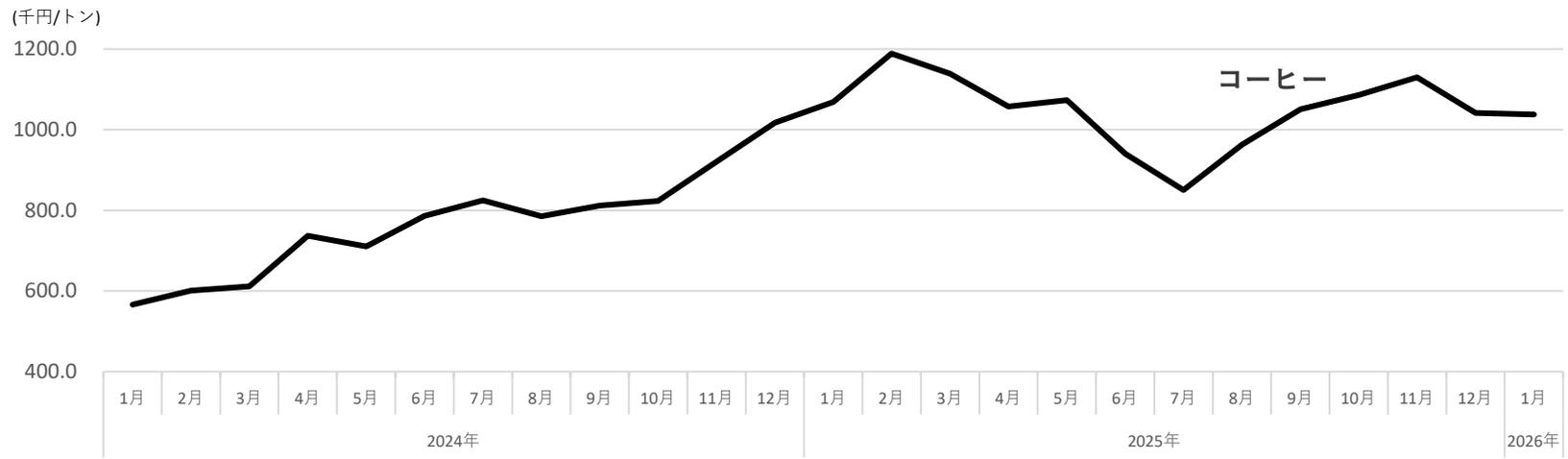
- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月に一時的に上昇したが、その後マレーシアとインドネシアのパーム油生産量増加や在庫の増加見通し等により下落。直近では、春節需要により一時的に相場が上昇したが、2月にマレーシアで開催されたPOC（生産者間協議）において弱気な価格見通しが示されたこと等があり、今後は軟調に推移していくことが考えられる。
- なたねについては、概ね安定している。
- コーヒーについては、ブラジルの天候不順による収穫量減少等により2024年以降上昇傾向。2025年3月以降、ブラジルの生産増加見込み等により下降傾向であったが、米国関税政策をめぐる不確実性等により上昇傾向に転じたものの、世界的な供給見通しの改善等により下降傾向。



2026年2月19日現在
□内は2024年1月以降の最高値。

パーム油
155.1千円/トン
178.8千円/トン
(2024.11)

なたね
72.4千円/トン
79.2千円/トン
(2025.6)



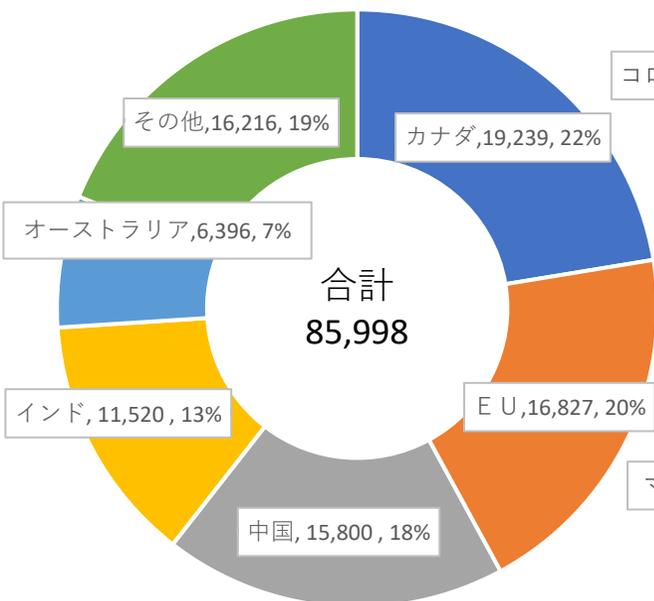
コーヒー
1037.4千円/トン
1188.8千円/トン
(2025.2)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況（単位：千トン）

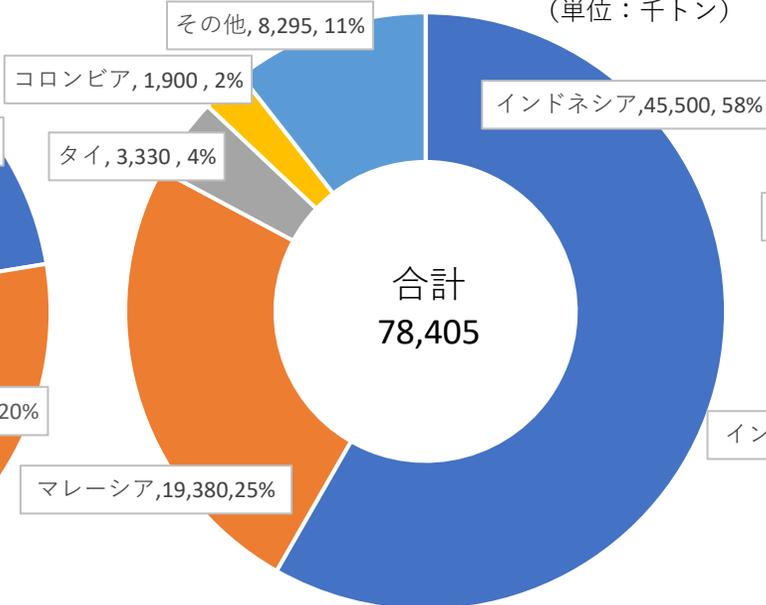
なたね生産量（2024/25）



※米国農務省 (PS&D)
2026年2月時点

パーム油生産量（2024/25）

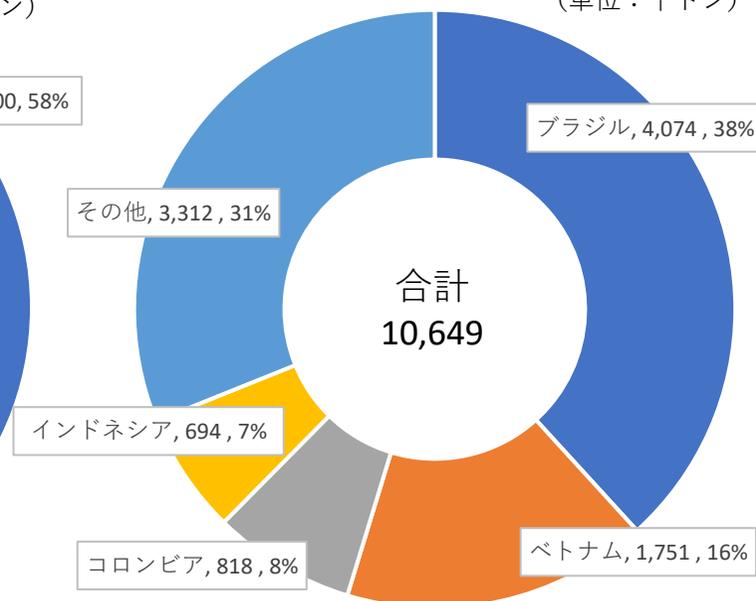
（単位：千トン）



※米国農務省 (PS&D)
2026年2月時点

コーヒー生産量（2024/25）

（単位：千トン）



※国際コーヒー機関 (ICO) 統計資料
2025年7月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2025年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,722	80.1%
オーストラリア	429	19.9%
その他	0	0.0%
合計	2,151	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	568	87.6%
インドネシア	79	12.2%
その他	1	0.2%
合計	648	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	147	40.9%
ベトナム	90	25.1%
コロンビア	38	10.6%
その他	84	23.4%
合計	359	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2024年												2025年												2026年																						
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月											
なたね	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9	70.4	67.0	66.7	72.3	67.8	72.4																						
前月比	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6	93.9	95.2	99.6	108.4	93.7	106.8																						
前年同月比	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2	112.1	111.4	103.0	102.1	104.3	105.4																						

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2024年												2025年												2026年																						
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月											
パーム油	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5	154.8	154.5	159.0	154.2	151.8	155.1																						
前月比	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3	108.7	99.8	102.9	97.0	98.4	102.1																						
前年同月比	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0	120.7	122.6	106.0	86.2	89.6	97.9																						

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和8年1月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は120.3～163.3(前年同月比は1.7%～15.9%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省)

品目	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近6か月							R8 1月	上昇率 (前年 同月比)
	年平均	年平均	年平均	R7 8月	9月	10月	11月	12月				
食パン	118.7	122.0	126.8	127.0	126.5	126.3	126.5	126.6	126.8	1.7%		
即席めん	119.7	122.4	119.4	120.6	119.1	119.2	120.0	114.4	120.3	2.0%		
豆腐	114.6	118.2	121.4	122.0	121.9	122.7	123.1	123.6	122.8	2.8%		
食用油 (キャノーラ油)	160.2	148.6	149.2	144.7	147.0	150.3	154.6	151.9	154.0	3.3%		
みそ	108.1	113.6	119.5	118.1	118.7	125.4	128.4	128.3	129.3	12.9%		
マヨネーズ	149.5	153.1	155.8	152.3	159.0	163.5	163.5	162.0	163.3	6.1%		
チーズ	131.1	133.0	139.1	145.1	144.5	144.3	137.5	134.5	140.3	5.5%		
バター	108.6	119.7	130.4	137.6	138.4	139.2	139.1	138.1	139.1	15.9%		
生鮮食品を 除く食料	112.6	116.9	125.2	126.4	126.7	127.7	128.3	128.2	128.4	6.2%		

品目	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近7か月							R8 1月	2月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	年平均	年平均	年平均	8月	9月	10月	11月	12月						
食パン	114.5	117.9	124.3	124.7	124.9	123.8	124.5	124.5	124.5	124.5	124.5	0.0%	0.4%	
即席めん	117.5	118.8	117.0	119.1	116.1	117.9	117.3	114.9	117.9	117.3	117.3	-0.5%	0.5%	
豆腐	113.0	116.4	119.3	119.3	118.9	120.2	120.2	119.8	120.7	120.2	120.2	-0.4%	1.9%	
食用油 (キャノーラ油)	159.4	145.8	142.0	142.2	142.9	143.8	144.1	144.1	144.1	145.4	145.4	0.9%	4.1%	
みそ	105.9	109.5	114.9	113.1	114.2	123.8	126.7	125.2	126.5	126.9	126.9	0.3%	15.4%	
マヨネーズ	139.8	141.2	142.5	139.9	145.4	149.2	149.2	148.9	150.3	151.3	151.3	0.7%	8.1%	
チーズ	126.5	127.0	133.8	138.2	139.2	138.7	136.2	129.8	133.7	139.7	139.7	4.5%	10.6%	
バター	108.0	119.3	131.4	138.5	139.4	139.8	140.1	137.4	138.9	137.4	137.4	-1.1%	15.1%	

資料: 農林水産省「食品価格動向調査」
注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。
注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

資料: 総務省「消費者物価指数」
注: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料6 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表
- 2026年3月号（2月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉

- （米国）25年の牛肉生産量は前年比3.6%減、26年は同1.0%減と予測
- （EU）枝肉価格の記録的な高値が継続するも、生産量は減少
- （豪州）25年の牛肉輸出は過去最高を記録、業界は対中国輸出の動向を注視
- （NZ）25/26年度の牛肉生産量と輸出量、前年割れの見込み

◆豚肉

- （カナダ）25年の豚と畜頭数、処理能力の向上などにより前年比2.5%増
- （チリ）25年1～11月の豚肉生産量は微増ながら、輸出量は減少

◆牛乳・乳製品

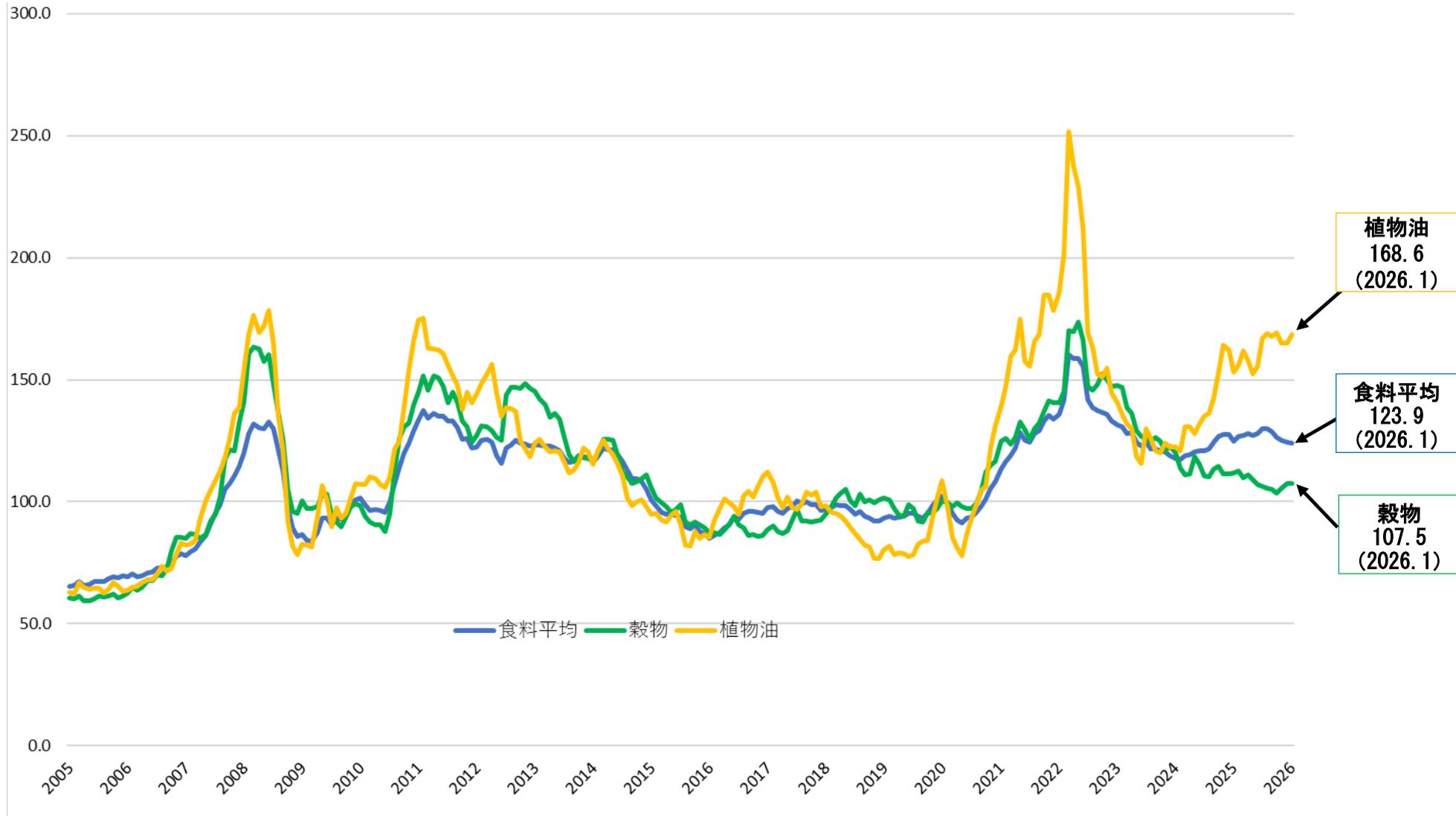
- （米国）25年12月の生乳生産量は増加、チーズの輸出量が過去最高を記録
- （EU）生乳取引価格、2カ月連続で前年同月を下回る
- （NZ）生乳生産量は8カ月連続で前年同月を上回って推移
- （中国）25年の生乳生産量は前年並み、生乳価格は下げ止まり

◆飼料穀物

- （世界・トウモロコシ）25/26年度は生産量の上方修正から期末在庫は上方修正
- （世界・大豆）大豆生産量の上方修正から期末在庫も上方修正
- （米国）米国は生産量の増加などから期末在庫は大幅に増加
- （中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2026.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コム等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

我が国の食料政策において最も重要な国の一つ、カナダについて(その1)

1. はじめに

読者の皆様、初めまして。農林水産省からの出向で、在カナダ日本大使館で勤務しております二田と申します。

今月号から3回に渡って、我が国の食料政策において極めて重要な位置を占めている国の一つであるカナダを、様々な観点からご紹介したいと思います。

初回となる今回は、カナダという国がどのような歴史や文化を持っているのかについて、簡単に記していきたいと思っています。

2. カナダの概要、成り立ち

おそらく本誌をご覧の方々の中で知らない人はいないであろう、北米大陸において、広大な国土を持つ国、カナダ。その国土面積は約 1,000 万平方キロメートルに及び、我が国の約 38 万平方キロメートルの約 27 倍にも相当します。一方、その広大な国土に住む人々の数は約 4,200 万人(2025 年4月。カナダ統計局推計)と我が国の3分の1程度しかなく、しかもその大部分はアメリカとの国境近くに住んでいるため、カナダには手つかずの美しい自然が広がっています。



【図1】カナダの地図

歴史的には、この地では先住民(ファースト・ネーション)の人々が狩猟採集生活を長く続

けていましたが、16 世紀以降、イギリスやフランスが入植し、それぞれが領地を持っていました。英仏間の長年にわたる戦争を経て、カナダはイギリス領となり、1867 年にカナダ自治領として独立。その後、段階的な措置を経て 1982 年に完全な国家主権を確立しました。

現在は 10 の州と3つの準州からなる連邦制の国家であり、また、イギリス連邦加盟国でイギリス国王チャールズ3世を元首とする立憲君主制の国家でもあります。首都はオタワです。なお、歴史的な経緯からカナダでは英語とフランス語が「連邦」の公用語になっています。(注:「州」の公用語は異なります。例えばケベック州においては、公用語はフランス語のみ。)

余談ですが、「カナダ」という国名は、ファースト・ネーションの人々が村という意味で使っていた「カナタ」という言葉を、あるフランス人入植者が地名と勘違いしてその地を「カナダ」と呼んだことがきっかけと言われています。

【今月のコラム】

3. カナダ料理と食にまつわる伝統

さて、そんなカナダに関して、読者の皆様は「カナダ料理」と聞いてどのような料理を思い浮かべるでしょうか？カナダと言えばやはりメープルシロップが有名ですが、カナダ料理と聞いて、ぱっと思いつく日本人はあまり多くないと思います。

筆者の考えでは、「プーティン(Poutine)」がカナダ料理としては一番有名ではないかと思えます(写真1)。フライドポテトに、グレービーソースとチーズカードをかけて提供する料理で、もともとはケベック州に起源を持つ料理とされています。しかし、今やカナダ全土のパブ等で提供されているほか、マクドナルドのような各種ファーストフード店でも提供されるほど一般的です。お世辞にも身体に優しい料理とは言えませんが、カナダを訪れた際には一度は試していただきたい逸品です。店舗によっては追加のトッピングとして牛肉やブルドポーク(豚のブロック肉を低温で調理し、繊維状にほぐしたもの)、ロブスターを載せて提供されるものもあり、これらも非常に美味しいです。

また、食にまつわるカナダの面白い伝統として、シュガー・シャックという行事があり、冒頭申し上げたカナダの代表的食品・メープルシロップと関わりのある行事です。メープルシロップは、サトウカエデの樹液を煮詰めて作られますが、その樹液(メープルサップと呼ばれています。)は冬の終わりから春(3月から4月)にかけて、樹体に穴を空けて蛇口のような器具を取り付けてバケツのような容器で採取されます(写真2)。

カナダでは長く厳しい冬の終わりを告げる食品がメープルシロップであり、日本におけるお花見のように、人々はメープルシロップを様々な料理にかけて楽しめます。これがシュガー・シャックと呼ばれるお祭りのような行事です。私もこのシュガー・シャックに参加したことがあります。提供されるありとあらゆる料理・飲み物にメープルシロップをかけて甘くして食べるため、非常に興味深い行事でした(写真3)。なお、相席のカナダ人曰く、メープルシロップをかけすぎて甘いものを摂りすぎると次の日二日酔いのような症状になることもあるらしいです。幸い私はそこまでの状態にはならずすみしました。



【写真1】BBQ ビーフを乗せたプーティン



【写真2】メープルサップを採取している様子

(緑色のバケツの中に樹液が貯まる)



【写真3】シュガー・シャックで提供された食事。

(プラスチックカップに入っているのがメープルシロップ)

【今月のコラム】

4. 国際食豊かなレストランの数々

カナダは多くの移民を受け入れている国であるため、そうした移民の方々のルーツの国の料理を提供するレストランが多くあります。大使館がある首都オタワの市街を歩いても中華、タイ、インド、ギリシャ、ナイジェリア、エチオピアの料理を提供するレストランがあり、様々な国の食文化を味わうことができます。

中でも筆者が驚いたのは、「シャワルマ」という料理を出すレストランの多さです。シャワルマは、レバノンに起源を持つと言われており、トルコのドネルケバブに似た料理です。どのシャワルマレストランでも立てた串に牛肉や鶏肉を刺したものを回転させながらヒーターで炙る光景(写真4)が見られ、注文が入ったらそこから肉をそぎ落とし、野菜などと共に薄く焼いたパンで巻いてラップサンドウィッチ(写真5)にして提供するのが一般的です。



【写真4】シャワルマレストランの回転式グリル



【写真5】シャワルマ

(25cmほどの長さがあり、非常にボリュームー)

筆者が知るだけでもオタワのダウンタウン周辺で10は下らない数のシャワルマレストランが存在し、郊外まで範囲を広げるとネット情報によれば40店舗以上のレストランがあるとされていることから、この料理がオタワではいかに人気かを物語っています。

今回は、カナダにおける日本食の現状等について紹介したいと思います。

文責: 二田 紘太郎(在カナダ日本国大使館 一等書記官)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介します。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 前月比

・アルゼンチン等で上方修正されたものの、トルコ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

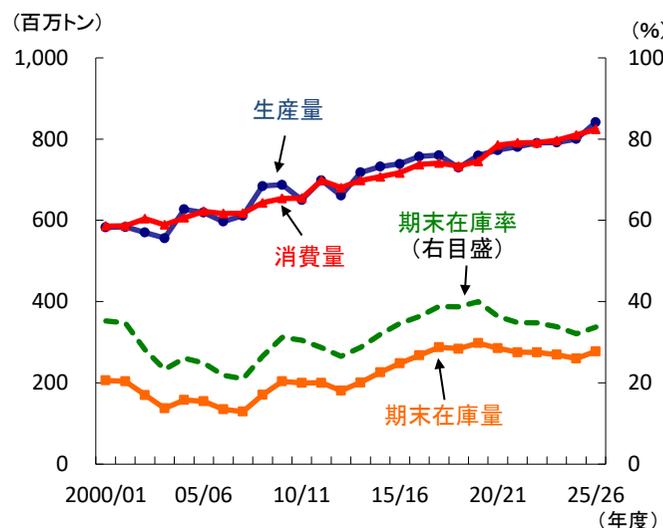
消費量 前年度比 前月比

・カナダ等で下方修正されたものの、インドネシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・EUで下方修正されたものの、アルゼンチン、カナダ等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省にて作成

◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	791.5	800.4	841.8	▲ 0.4	5.2
消費量	796.9	810.0	824.1	0.2	1.7
うち飼料用	159.1	156.8	165.0	▲ 0.5	5.2
輸出量	222.2	210.5	222.0	2.2	5.5
輸入量	222.8	201.8	217.7	2.2	7.9
期末在庫量	269.3	259.8	277.5	▲ 0.7	6.8
期末在庫率	33.8%	32.1%	33.7%	▲ 0.1	1.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 February 2026)

○ 2025/26年度 世界の小麦の生産量(841.8百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸出量(222.0百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸入量(217.7百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積は減少するものの、単収が増加することから前年度から 0.3%増、過去5年平均(48.4 百万トン)から 11.5%増の 54.0 百万トンとなる見込み。

同「Crop Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度の収穫面積は、前年度から 3.6%減の 1,507 万ヘクタールとなる見込み。種類別には、冬小麦が前年度から 2.7%減の 1,032 万ヘクタール、デュラム小麦を除く春小麦も同 7.5%減の 389 万ヘクタールとなる一方、デュラム小麦が同 4.3%増の 86 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の実生産量は前年度から 0.3%増の 5,401 万トンとなる見込み。種類別には、デュラム小麦を除く春小麦が前年度から 8.7%減の 1,352 万トンとなる一方、冬小麦が同 3.5%増の 3,814 万トン、デュラム小麦が同 7.7%増の 235 万トンとなる見込み。冬小麦は、乾燥で単収が減少した前年度と比べ降雨が多く、単収が増加した。一方、春小麦は、乾燥により作柄が悪化した。

同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2026.1.12)によれば、2026/27 年度の冬小麦の作付面積は、前年度(1,342 万ヘクタール)に比べ 0.5%減の 1,335 万ヘクタールとなる見込み。銘柄別には、ハード・レッド・ウインターが前年度からわずかに減少し 951 万ヘクタール、ソフト・レッド・ウインターが前年度からわずかに増加し 248 万ヘクタール、ホワイト・ウインターが前年度から5%減少し 136 万ヘクタールとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.9%増、過去5年平均(22.2 百万トン)から 10.2%増の 24.5 百万トンと、5年ぶりの高水準となる見込み。

同「Wheat Outlook」(2026.2.12)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年6～11 月の全小麦(小麦粉を含む)の輸出量は、前年同期(1,126 万トン)に比べ 23%増の 1,384 万トンとなった(図)。

同「Global Agricultural Trade System」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年6～11 月の輸出量は、前年同期(1,097.0 万トン)に比べ 23.3%増の 1,352.8 万トン。輸出先国別には、メキシコ 213.0 万トン(15.7%)、フィリピン 118.7 万トン(8.8%)、ナイジェリア 118.6 万トン(8.8%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、消費量の引下げ等を受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度から 8.9%増の 25.3 百万トンとなる見込み。3年連続の増加となり、6年ぶりの高水準となる見込み。

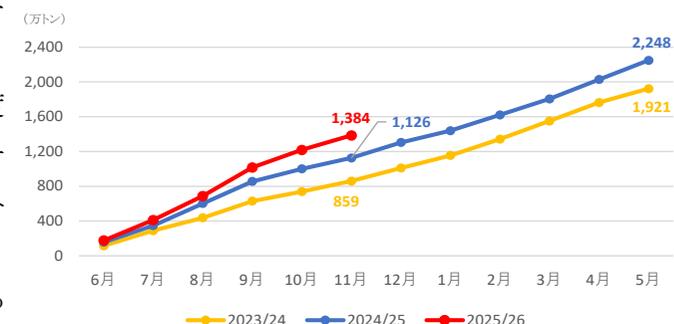
小麦—米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年6月～26年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.1	53.9	54.0	-	0.3
消費量	30.2	31.1	30.7	▲ 0.1	▲ 1.3
うち飼料用	2.3	3.1	2.7	-	▲ 11.4
輸出量	19.2	22.5	24.5	-	8.9
輸入量	3.8	4.1	3.3	-	▲ 19.3
期末在庫量	19.0	23.3	25.3	0.1	8.9
期末在庫率	38.4%	43.4%	45.9%	0.3	2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.01	15.63	15.07	-	▲ 3.6
単収(t/ha)	3.27	3.44	3.58	-	4.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(10 February 2026)

図 米国の小麦輸出量の推移(累計)



< カナダ > 2025/26 年度の生産量は前年度から 11.2%増加する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.2.18)によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が増加することを受け前年度から 11.2%増、過去5年平均(32.4 百万トン)から 23.2%増の 40.0 百万トンとなり史上最高の生産量となる見込み。種類別には、普通小麦は、前年度(29.6 百万トン)から 11.0%増、過去5年平均(27.2 百万トン)から 20.6%増の 32.8 百万トンとなり史上最高となる見込み。デュラム小麦も、アルバータ州及びサスカチュワン州の単収増を受け前年度(6.4 百万トン)から 11.8%増、過去5年平均(5.2 百万トン)から 37.1%増の 7.1 百万トンとなり、2016/17 年度(7.8 百万トン)以降で最大の生産量となる見込み。生育期の適切な降雨により生産量が増加した。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、堅調な輸出を受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 1.8%減の 28.7 百万トンと史上2番目の輸出量となる見込み。種類別には、普通小麦が前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 0.4%減の 23.3 百万トン。デュラム小麦は前月予測からわずかに上方修正されたものの、従来からの輸出先国であるアルジェリア、モロッコ、米国等の需要減を受け同 7.2%減の 5.4 百万トン。USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、好調な輸出ペースを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、史上最高となった前年度から 1.1%減となるものの、過去5年平均(24.4 百万トン)から 18.9%増の 29.0 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～12 月の輸出量は、前年同期(1,163.2 万トン)に比べ 5.2%増の 1,223.2 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期(931.4 万トン)に比べ 9.5%増の 1,019.6 万トンで、輸出先国別には、中国 144.7 万トン(14.2%)、バングラデシュ 102.0 万トン(10.0%)、日本 90.0 万トン(8.8%)の順。デュラム小麦は前年同期(231.8 万トン)に比べ 12.1%減の 203.7 万トンで、輸出先国別には、イタリア 53.3 万トン(26.2%)、アルジェリア 34.5 万トン(16.9%)、モロッコ 29.9 万トン(14.7%)の順(表)。

USDA「Grain and Feed Update」(2026.2.2)によれば、2025/26 年度第1四半期(2025.8～10 月)の普通小麦の輸出量は、史上最高となった。これは、バングラデシュ、中国、スペイン及びEU向けの輸出が大きく増加したことによる。一方、同期間のデュラム小麦の輸出は、過去5年平均から2%増となったものの、前年同期からは3%減となった。これは、モロッコ向けの輸出が減少したことによる。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、消費量及び輸出量の引上げを受け前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、前年度から 78.7%増の 7.4 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け前月予測から 0.4 百万トン下方修正されたものの、前年度から 40.9%増の 5.9 百万トンとなる見込み。

小麦一カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年8月～26年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	33.4	35.9 (35.9)	40.0 (40.0)	- (-)	11.2 (11.2)
消費量	9.0	8.4 (8.0)	9.9 (8.2)	▲0.5 (0.1)	18.0 (2.5)
うち飼料用	3.8	3.0 (3.3)	4.5 (3.6)	▲0.5 (0.04)	48.0 (8.5)
輸出量	25.4	29.3 (29.2)	29.0 (28.7)	1.0 (0.1)	▲1.1 (▲1.8)
輸入量	0.6	0.6 (0.1)	0.6 (0.2)	- (0.1)	▲1.6 (83.5)
期末在庫量	5.3	4.2 (4.1)	5.9 (7.4)	▲0.4 (▲0.2)	40.9 (78.7)
期末在庫率	15.4%	11.1% (11.1%)	15.2% (19.9%)	▲1.3 (▲0.5)	4.1 (8.9)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.71	10.65 (10.65)	10.62 (10.62)	- (-)	▲0.3 (▲0.3)
単収(t/ha)	3.12	3.37 (3.37)	3.76 (3.76)	- (-)	11.6 (11.6)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 February 2026)
AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(18 February 2026) ※()書き。

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

○普通小麦							
2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～12月)			2025/26年度 (2025年8月～12月)	
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)
インドネシア	243.2	10.3	インドネシア	97.2	10.4	中国	144.7
中国	206.1	8.7	日本	87.6	9.4	バングラデシュ	102.0
日本	191.0	8.1	コロンビア	71.0	7.6	日本	90.0
ペルー	164.2	6.9	ペルー	59.1	6.3	インドネシア	84.9
コロンビア	143.1	6.0	ナイジェリア	53.5	5.7	コロンビア	49.1
その他	1,419.1	60.0	その他	563.1	60.5	その他	548.8
計	2,366.5	100.0	計	931.4	100.0	計	1,019.6
○デュラム小麦							
2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～12月)			2025/26年度 (2025年8月～12月)	
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)
アルジェリア	156.8	27.2	イタリア	55.4	23.9	イタリア	53.3
モロッコ	124.2	21.5	モロッコ	47.8	20.6	アルジェリア	34.5
イタリア	83.8	14.5	アルジェリア	35.5	15.3	モロッコ	29.9
米国	51.0	8.8	米国	19.3	8.3	米国	13.2
日本	22.7	3.9	スペイン	14.0	6.0	日本	11.2
その他	138.2	24.0	その他	59.8	25.8	その他	61.5
計	576.7	100.0	計	231.8	100.0	計	203.7

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2025/26 年度の輸出量は前年度から 14.2%増加する見込み(USDA)

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.5%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 9.6%増の 37.0 百万トンとなり、史上2番目の生産量となる見込み(図)。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2025.12.2)によれば、2025/26 年度の実績は、単収の引上げを受け前回予測(9月)から 1.8 百万トン上方修正され、単収が増加することを受け前年度(34.1 百万トン)から 4.3%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 5.4%増の 35.6 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み。州別には、ウェスタンオーストラリア(WA 州)は 2.1 百万トン上方修正され 13.4 百万トン(前年度から 5.9%増)、サウスオーストラリア州(SA 州)はわずかに上方修正され 4.7 百万トン(同 71.1%増)、クイーンズランド州(QLD 州)は 0.3 百万トン上方修正され 2.3 百万トン(同 1.3%増)となる一方、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)は 0.1 百万トン下方修正され 11.1 百万トン(同 14.3%減)、ビクトリア州(VIC 州)は 0.5 百万トン下方修正され 4.1 百万トン(同 15.7%増)と、特に WA 州では、平年を上回る降雨と穏やかな春の気候により生産量が増加した。

西豪州穀物産業協会(GIWA)「Crop Report」(2026.2.13)によれば、2025/26 年度の WA 州の実績は、前回(11月)予測から 0.3 百万トン上方修正され、13.3 百万トンとなる見込み。2025年7、8月に大部分の地域で十分な降雨があり、その後の穀粒の生育時期に穏やかな気温が続いたことによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加を受け前年度から 14.2%増、過去5年平均(25.3 百万トン)から 6.6%増の 27.0 百万トンとなり史上3番目の輸出量となる見込み(図)。同「Grain and Feed Update」(2026.1.21)によれば、2025/26 年度のうち 2025年10、11月の輸出量は 2.8 百万トンと、史上最高の輸出量となった 2022/23 年度に次ぐ好調なスタートとなった。ABARES によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.2 百万トン上方修正され、供給量が増加することを受け前年度から 9.1%増、過去5年平均(25.3 百万トン)から 1.8%増の 25.7 百万トンとなる見込み。

同「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025年10～12月の輸出量は、前年同期(386.7 万トン)に比べ 32.5%増の 512.4 万トン。輸出先国別には、インドネシア 96.4 万トン(18.8%)、フィリピン 86.8 万トン(16.9%)、中国 56.2 万トン(11.0%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.03 百万トン上方修正され、前年度から 28.3%増の 5.1 百万トンとなる見込み。ABARES によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量及び消費量の引上げ等を受け前回予測から 0.8 百万トン下方修正されるものの、前年度から 14.7%増の 5.1 百万トンとなる見込み。

小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値	前月(前回)予測 からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	26.0	34.1 (34.1)	37.0 (35.6)	- (1.8)	8.5 (4.3)	
消費量	8.3	9.1 (9.0)	9.1 (9.3)	- (0.4)	- (3.0)	
うち飼料用	4.8	5.6	5.5	-	▲1.8	
輸出量	19.8	23.7 (23.5)	27.0 (25.7)	- (1.2)	14.2 (9.1)	
輸入量	0.2	0.2	0.2	-	4.5	
期末在庫量	2.4	4.0 (4.5)	5.1 (5.1)	0.03 (▲0.8)	28.3 (14.7)	
期末在庫率	8.6%	12.2% (13.7%)	14.2% (14.7%)	0.1 (▲3.1)	2.0 (0.9)	

(参考)

収穫面積(百万ha)	12.37	13.06 (13.06)	12.70 (12.71)	- (-)	▲2.8 (▲2.7)
単収(t/ha)	2.10	2.61 (2.61)	2.91 (2.80)	- (0.14)	11.5 (7.2)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 February 2026)

ABARES「Australian Crop Report」(2 December 2025) ※()書き。

図 豪州の小麦の生産量・輸出量の推移(USDA)



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～12月)		2025/26年度 (2025年10月～12月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	449.6	19.0	72.8	18.8	96.4	18.8
フィリピン	352.7	14.9	65.7	17.0	86.8	16.9
タイ	170.9	7.2	36.6	9.5	56.2	11.0
ベトナム	157.4	6.7	35.1	9.1	50.4	9.8
韓国	146.5	6.2	31.7	8.2	29.0	5.7
イエメン	137.6	5.8	17.4	4.5	25.9	5.1
その他	946.6	40.1	127.4	32.9	167.6	32.7
計	2,361.3	100.0	386.7	100.0	512.4	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 20.0%増加する見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2026.1.29)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引下げを受け前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、主産国で生育期間を通じた降雨過多等により減産となった前年度から 20.0%増、過去5年平均(129.4 百万トン)から 9.9%増の 142.3 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦がドイツ等の生産量引上げにより前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、フランス、ドイツ、ルーマニア等で生産量が回復することを受け前年度から 21.0%増、過去5年平均(121.8 百万トン)から 10.2%増の 134.2 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、ドイツの生産量引下げにより前月予測からわずかに下方修正されたものの、前年度から 5.4%増、過去5年平均(7.6 百万トン)から 6.2%増の 8.1 百万トンとなる見込み。

USDA「World Agricultural Production」(2025.12.9)によれば、2025/26 年度の実産量は、春先の降雨と穏やかな気温により生育に好ましい気象条件であった。その後も広範囲で良好な天候が続き、夏季には EU 全体が乾燥状態であったものの、影響は軽微であり、主産国の生産量は前年度から増加した。

【貿易情報・その他】EC によれば、2025/26 年度の消費量は、飼料用消費の引上げを受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、飼料用消費量が増加することを受け前年度から 1.1%増の 112.5 百万トンとなる見込み。USDA「Grain and Feed Quarterly」(2025.12.4)によれば、当該増加は、乾燥の影響により EU の 2025/26 年度とうもろこしの生産量が減少し、小麦の飼料用消費が増加することによる。

EC によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からわずかに上方修正されたものの、関税割当制度等の再開等によりウクライナからの輸入が減少すると見込まれることを受け前年度から 42.2%減の 5.8 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」(2026.1.16)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～11 月の輸入量は、ウクライナからの輸入が大きく減少したこと等により前年同期(466.6 万トン)に比べ 36.1%減の 298.4 万トン(図)。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 44.6%減の 226.9 万トンとなる一方、デュラム小麦は同 25.1%増の 71.5 万トン(表)。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 1.5 百万トン下方修正されたものの、生産量が回復することを受け前年度から 15.8%増の 30.4 百万トンとなる見込み。同「EU trade for cereals」(2026.1.16)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～11 月の輸出量は、前年同期(1,234.9 万トン)に比べ 9.7%増の 1,355.3 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 10.0%増の 1,318.1 万トン、デュラム小麦が同 1.6%増の 37.2 万トン(表)。

2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ等を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 60.1%増の 13.8 百万トンとなる見込み。

小麦—EU27 (冬小麦を主に栽培)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)			
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	135.4	122.2 (118.6)	144.0 (142.3)	- (▲0.2)	17.9 (20.0)	
消費量	110.5	109.0 (111.2)	114.5 (112.5)	- (0.5)	5.0 (1.1)	
うち飼料用	46.5	45.0 (46.2)	50.0 (47.1)	- (0.5)	11.1 (2.0)	
輸出入量	38.0	27.9 (26.3)	31.5 (30.4)	▲1.0 (▲1.5)	12.8 (15.8)	
輸入量	12.7	10.6 (10.0)	6.0 (5.8)	0.5 (0.1)	▲43.6 (▲42.2)	
期末在庫量	15.8	11.7 (8.6)	15.7 (13.8)	1.5 (1.0)	34.3 (60.1)	
期末在庫率	10.6%	8.5% (6.3%)	10.7% (9.6%)	1.1 (0.8)	2.2 (3.4)	

(参考)
 収穫面積(百万ha) 24.32 22.74 (22.52) 23.97 (23.72) - (-) 5.4 (5.4)
 単収(t/ha) 5.57 5.37 (5.27) 6.01 (6.00) - (▲0.01) 11.9 (13.9)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 February 2026)
 EC「EU Cereals Balance Sheets」(29 January 2026) ※()書き。

図 EU の小麦輸入量の推移(累計)



資料:EC「EU trade for cereals」(2026.1.16)をもとに農林水産省で作成

表 EU の小麦の輸出量及び輸入量

	〇輸出量		〇輸入量		〇輸出量		〇輸入量		
	2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		2025/26年度 (2025年7月～11月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		2025/26年度 (2025年7月～11月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	
普通小麦	モロッコ	342.2	13.5	モロッコ	203.8	15.5	カナダ	446.6	56.1
	アルジェリア	324.4	12.8	アルジェリア	146.5	11.1	カナダ	134.4	16.9
	ナイジェリア	281.5	11.1	サザンアフリカ	80.3	6.1	モルドバ	61.9	7.8
	その他	1,593.8	62.7	その他	887.5	67.3	その他	153.6	19.3
	小計	2,541.9	100.0	小計	1,318.1	100.0	小計	796.6	100.0
デュラム小麦	チェコ	21.4	25.5	サザンアフリカ	8.7	23.4	カナダ	108.2	52.4
	アルジェリア	11.3	13.5	エジプト	4.6	12.4	トルコ	34.3	16.6
	コソボ	10.0	11.9	英国	3.5	9.4	カザフスタン	29.6	14.3
	その他	41.2	49.1	その他	20.3	54.7	その他	34.4	16.6
	小計	84.0	100.0	小計	37.2	100.0	小計	206.5	100.0
小麦計	2,625.8		小麦計	1,355.3		小麦計	1,003.0		

資料:EC「EU trade for cereals」(2026.1.16)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2025/26 年度の輸出量は前年度から 2.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、霜害と高温乾燥により生産量が減少した前年度から単収が増加することを受け前年度から 9.7%増、過去5年平均(85.1 百万トン)から 5.1%増の 89.5 百万トンとなり史上3番目となる見込み。種類別には、冬小麦は、前年度(55.8 百万トン)から 12.9%増の 63.0 百万トン。春小麦も、前年度(25.8 百万トン)から 2.7%増の 26.5 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度の小麦について、作付面積は前年度から減少したものの、南部と極東を除く全ての地域で前年度を上回る単収となり、主に春小麦の生産量増加が作付面積の減少を補い、小麦の生産量は史上3番目の水準となった。

ロシア連邦統計庁は、1月 27 日、2025 年 12 月 26 日に発表した 2025/26 年度の小麦生産量の速報値について修正を行った。12 月発表(91.37 百万トン)から 0.47 百万トン下方修正され、90.9 百万トンとなった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.3%増、過去5年平均(44.1 百万トン)と同水準の 44.0 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み。

ロシア連邦政府は、2025 年 12 月 24 日、2025/26 年度後半(2026 年2月 15 日～6月 30 日)に穀物(小麦・メスリン、大麦及びびとうもろこし)に設定される輸出枠を 2,000 万トン(前年度は小麦・メスリンのみ 1,060 万トン)とすることを発表した。現地情報会社によれば、小麦は世界的に供給が潤沢で国際相場が下落していること、ロシアでは主要な輸出地域である黒海沿岸が不作気味である一方、内陸地域が豊作で輸送コストが高くなること等により輸出枠の全量消化は難しい見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(3,258.5 万トン)に比べ 11.6%減の 2,882.0 万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト 553.3 万トン(19.2%)、トルコ 428.9 万トン(14.9%)、イラン 173.4 万トン(6.0%)の順(表)。2025 年に小麦が不作であったトルコとイランへの輸出が増加したが、アルゼンチン、ブラジル及び豪州との競合のため、バングラデシュへの輸出は減少した。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 38.7%増の 14.7 百万トンとなる見込み。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	91.5	81.6	89.5 (87.6)	-	9.7
消費量	39.0	40.0	41.7 (41.0)	-	4.3
うち飼料用	16.0	17.0	18.5 (17.4)	-	8.8
輸出量	55.5	43.0	44.0 (44.2)	-	2.3
輸入量	0.3	0.3	0.3 (0.5)	-	-
期末在庫量	11.7	10.6	14.7 (12.3)	-	38.7
期末在庫率	12.4%	12.8%	17.1% (14.4%)	-	4.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.83	27.80	26.30 (26.37)	-	▲ 5.4
単収(t/ha)	3.17	2.94	3.40 (3.32)	-	15.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

写真 越冬中の 2026/27 年度冬小麦(2026.2.7 撮影)



黒海沿岸のクラスノダール地方の越冬中の小麦圃場。スノーカバーが不足し、一部が露出しているものの、大きな被害はないとのこと。

表 ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年7月～2026年1月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	821.2	20.2	エジプト	642.2	19.7	エジプト	553.3	19.2
トルコ	310.4	7.6	バングラデシュ	220.4	6.8	トルコ	428.9	14.9
バングラデシュ	277.3	6.8	トルコ	210.3	6.5	イラン	173.4	6.0
アルジェリア	173.4	4.3	アルジェリア	172.1	5.3	バングラデシュ	151.2	5.2
イスラエル	163.9	4.0	サウジアラビア	135.8	4.2	イスラエル	134.3	4.7
その他	2,327.2	57.1	その他	1,877.7	57.6	その他	1,440.9	50.0
合計	4,073.4	100.0	合計	3,258.5	100.0	合計	2,882.0	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

<ウクライナ> 2025/26年度の生産量は前年度から1.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から1.7%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)から17.6%減の23.0百万トンとなる見込み(図)。

現地情報会社によれば、1月末現在、2026/27年度の冬小麦は越冬期を迎えており、越冬の状況は概ね良好とみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から11.1%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(18.1百万トン)から22.7%減の14.0百万トンとなる見込み(図)。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきた。当該措置は2025年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、EUとウクライナの連合委員会は10月14日に合意を承認し、10月29日に発効となった。これにより、小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直された。報道によれば、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産農産物に対して、2023年から独自に輸入禁止措置を行っており、10月29日の新たなDCFTA発効後も同措置を維持する意向である。

現地情報会社によれば、2025/26年度のうち2025年7月～2026年1月の輸出量は、前年同期(1,075.7万トン)に比べ21.9%減の839.8万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト216.9万トン(25.8%)、インドネシア141.5万トン(16.8%)、アルジェリア138.6万トン(16.5%)の順(表)。昨年度まで輸出先第1位であったスペインへの輸出が大きく減少したことや、主要輸出先である北アフリカや中東におけるロシア産小麦等との競合が要因。また、USDA「Grain and Feed Quarterly」(2026.2.4)によれば、ロシアによるエネルギー網、鉄道・港湾インフラ、船舶への攻撃やEUのウクライナ産小麦に対する関税割当制度等の適用再開が影響しているとみられる。引き続き、ロシアによる輸送インフラの攻撃が続いており、輸出に対する大きな抑制要因となるおそれがある。

ウクライナ政府は、2025年12月31日、2026年にブルガリア、ルーマニア、スロバキア、ハンガリー及びポーランドに輸出を行う場合に、ライセンスが必要な農産物リストを承認した。対象には小麦やとうもろこし等が含まれている。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、消費量の引上げを受け0.3百万トン下方修正されたものの、前年度から75.3%増の1.6百万トンとなる見込み。

小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	23.0	23.4	23.0 (26.0)	-	▲ 1.7
消費量	5.9	8.3	8.4 (9.3)	0.3	1.2
うち飼料用	1.6	3.6	3.5 (2.5)	-	▲ 2.8
輸出量	18.6	15.8	14.0 (14.5)	-	▲ 11.1
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
期末在庫量	1.5	0.9	1.6 (3.1)	▲ 0.3	75.3
期末在庫率	6.2%	3.9%	7.3% (12.8%)	▲ 1.5	3.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	5.01	5.20	5.50 (6.35)	-	5.8
単収(t/ha)	4.59	4.50	4.18 (4.09)	-	▲ 7.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移

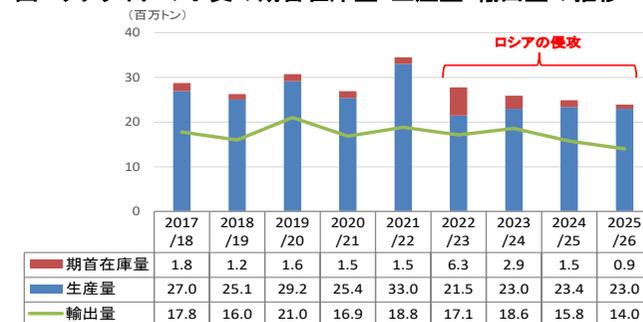


表 ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年1月)		2025/26年度 (2025年7月～2026年1月)			
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		
スペイン	326.1	20.9	258.1	24.0	エジプト	216.9	25.8	
エジプト	211.1	13.5	インドネシア	155.4	14.4	インドネシア	141.5	16.8
アルジェリア	195.1	12.5	エジプト	95.6	8.9	アルジェリア	138.6	16.5
インドネシア	158.8	10.2	アルジェリア	94.3	8.8	イエメン	68.9	8.2
ベトナム	104.7	6.7	ベトナム	88.4	8.2	ベトナム	53.1	6.3
その他	566.5	36.3	その他	383.8	35.7	その他	220.8	26.3
合計	1,562.2	100.0	合計	1,075.7	100.0	合計	839.8	100.0

資料:APK-Inform Agencyのデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26年度の輸入量は前年度から43.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度と同水準、過去5年平均(137.1百万トン)から2.2%増の140.1百万トンとなり、史上最高の前年度に次ぐ生産量となる見込み(図)。

中国国家统计局「2025年糧食生産量データ」(2025.12.12)によれば、2025年の小麦の作付面積は、前年(23.59百万ヘクタール)からわずかに減少し23.58百万ヘクタール。単収は、前年(5.94トン/ヘクタール)と比べ同水準の5.94トン/ヘクタール。生産量は、前年(140.1百万トン)と同水準の140.1百万トン。

中国中央气象台「全国農業気象月報」(2026.2.5)によれば、2026/27年度の冬小麦について、北部の主産地では気温が高めで土壌水分量も適度に保たれ越冬に適した条件となった。

同「作物生育期監測」(2026.2.8~14)によれば、2026/27年度の冬小麦は、黄淮地区(河南省、安徽省、江蘇省、山東省)及び華北(河北省、山西省、内モンゴル自治区等)を中心に大部分が越冬期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から1.3%減、過去5年平均(150.9百万トン)から1.9%減の148.0百万トンとなる見込み(図)。

2025/26年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、在庫量の減少等を受け前年度から43.9%増となるものの、過去5年平均(10.3百万トン)から41.5%減の6.0百万トンとなる見込み(図)。

同「Grain and Feed Update」(2026.1.23)によれば、2025年12月、アルゼンチンは製粉用として約16万トンの小麦を中国に輸出した。これは約30年ぶりの輸出で、2024年1月に中国がアルゼンチン産小麦の輸入を再認可したことを受けたもの。

同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、2025年12月にはロシア産小麦ふすまの市場開放も発表された。また、2025年末までに中国は米国産小麦約20万トンの購入を予約している。トレーダーらは、2025/26年度の中国のとうもろこしの生産量が過去最高を記録したものの、中国のとうもろこし及び春小麦の品質が大幅に低下しているため、更なる輸入が必要になるとみている。

中国海関統計によれば、2025/26年度のうち2025年7~12月の輸入量は、前年同期(190.0万トン)に比べ6.3%増の202.0万トンとなっている。輸入先国別には、カナダ151.9万トン(75.2%)、豪州35.6万トン(17.6%)、ロシア7.0万トン(3.5%)の順となっている(表)。米国からの輸入は76トンと大きく減少している。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から2.3%減の124.8百万トンとなる見込み(図)。

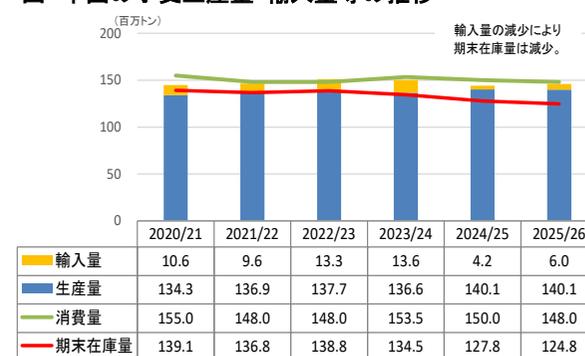
小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月~26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	136.6	140.1	140.1 (140.1)	-	▲ 0.02
消費量	153.5	150.0	148.0 (146.8)	-	▲ 1.3
うち飼料用	37.0	33.0	31.0 (28.0)	-	▲ 6.1
輸 出 量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	▲ 2.0
輸 入 量	13.6	4.2	6.0 (6.2)	-	▲ 43.9
期末在庫量	134.5	127.8	124.8 (135.5)	-	▲ 2.3
期末在庫率	87.1%	84.6%	83.8% (91.6%)	-	▲ 0.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.63	23.59	23.58 (23.64)	-	▲ 0.04
単収(t/ha)	5.78	5.94	5.94 (5.93)	-	-

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 中国の小麦生産量・輸入量等の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

国名	2024/25年度 (2024年7月~2025年6月)		2024/25年度 (2024年7月~12月)		2025/26年度 (2025年7月~12月)			
	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)		
カナダ	185.9	48.2	66.4	35.0	151.9	75.2		
豪州	86.9	22.5	46.2	24.3	35.6	17.6		
米国	46.2	12.0	カザフスタン	28.4	15.0	ロシア	7.0	3.5
カザフスタン	30.8	8.0	ロシア	25.2	13.3	カザフスタン	4.3	2.1
ロシア	29.7	7.7	豪州	20.3	10.7	日本	2.5	1.2
日本	4.9	1.3	日本	2.6	1.3	フランス	0.7	0.3
その他	1.5	0.4	その他	0.9	0.5	その他	0.1	0.1
合計	385.9	100.0	合計	190.0	100.0	合計	202.0	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 前月比

・メキシコで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

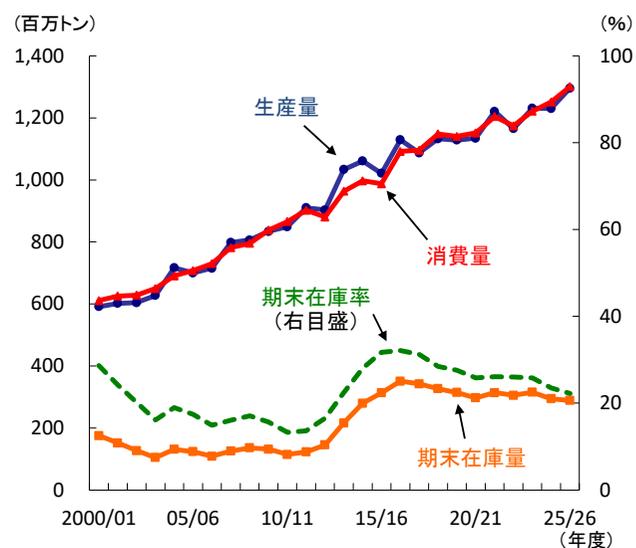
消費量 前年度比 前月比

・EU等で下方修正されたものの、トルコ、メキシコ、レバノン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・ウクライナ等で下方修正されたものの、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

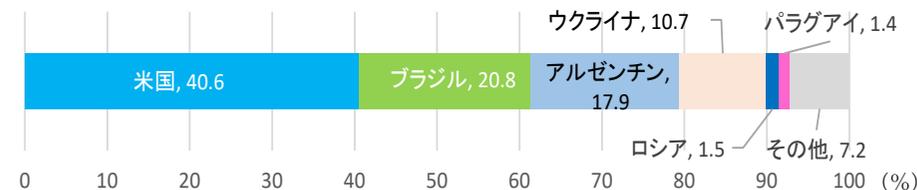
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,231.1	1,230.6	1,295.9	▲ 0.1	5.3
消費量	1,221.2	1,251.5	1,301.3	1.5	4.0
うち飼料用	770.0	786.7	814.6	1.4	3.6
輸出量	192.7	187.1	206.6	1.4	10.4
輸入量	197.6	186.1	192.1	1.9	3.2
期末在庫量	315.3	294.4	289.0	▲ 1.9	▲ 1.8
期末在庫率	25.8%	23.5%	22.2%	▲ 0.2	▲ 1.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 February 2026)

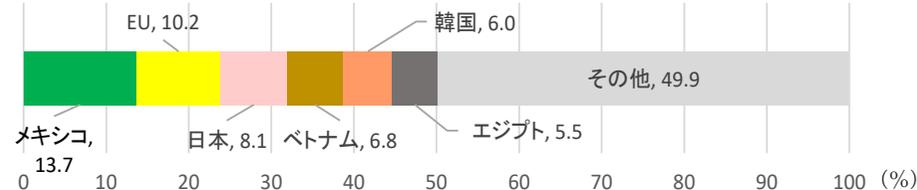
○ 2025/26年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,295.9百万トン)



○ 2025/26年度 世界のとうもろこしの輸出量 (206.6百万トン)



○ 2025/26年度 世界のとうもろこしの輸入量 (192.1百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 14.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 14.3%増、過去5年平均(370.8 百万トン)から 16.6%増の 432.3 百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆から作付けを切り替えたとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及びエタノール用需要の増加等を受け、前年度から 7.4%増の 334.5 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度から 15.5%増の 83.8 百万トンと、史上最高の見込み。同「Feed Outlook」(2026.2.12)によれば、早い輸出ペースと米国産とうもろこしに対する堅調な需要により史上最高の水準に引き上げられた。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 9月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(2,187.9 万トン)に比べ 51.2%増の 3,308.9 万トン。輸出先国別には、メキシコ 1,027.3 万トン(31.0%)、日本 599.9 万トン(18.1%)、韓国 336.7 万トン(10.2%)の順となっている(表)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.2.10)によれば、2月5日現在の輸出価格は、アルゼンチンは米国の輸出量増加による圧力により前月から7ドル/トン下落し 214ドル/トン、ブラジルは季節的に生産量が少ない中、他の輸出国の動向を反映し2ドル/トン下落し 223 ドル/トンとなった一方、米国は世界的な需要の堅調さと冬の嵐によるはしけ輸送の混乱により4ドル/トン上昇し 220ドル/トンとなった(図)。

米国環境保護庁(EPA)は、製油業者等に対しガソリン及びディーゼルに一定量の再生可能燃料を混合することを義務付けており、2025 年6月に 2026～2027 年の混合義務量案を発表した。この案では総混合義務量を 2025 年の 223.3 億ガロンに対して、2026 年には 240.2 億ガロン、2027 年には 244.6 億ガロンと過去最高の数量を設定。報道情報によれば、2026 年の義務量は 2026 年3月までに最終決定される見通し。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 2.5 百万トン下方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 37.1%増、過去5年平均(37.0 百万トン)から 45.9%増の 54.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 2.7 ポイント増の 12.9%となる見込み。

とうもろこしー米国

(概ね4～5月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (2025年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	389.7	378.3	432.3	-	14.3
消費量	322.9	311.6	334.5	-	7.4
うち飼料用	148.1	138.6	157.5	-	13.7
エタノール用等	139.4	138.1	142.2	-	3.0
輸出量	57.3	72.6	83.8	2.5	15.5
輸入量	0.7	0.6	0.6	-	16.4
期末在庫量	44.8	39.4	54.0	▲2.5	37.1
期末在庫率	11.8%	10.3%	12.9%	▲0.7	2.7

(単位:百万トン)

収穫面積(百万ha) 35.01 33.61 36.93 - 9.9
 単収(t/ha) 11.13 11.26 11.71 - 4.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

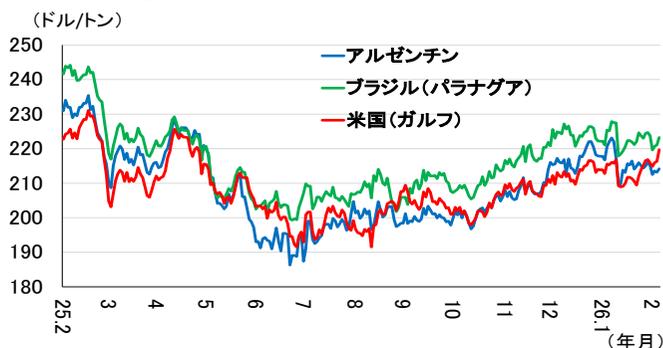
「World Agricultural Production」(10 February 2026)

表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)		2024/25年度 (2024年9月～2025年1月)		2025/26年度 (2025年9月～2026年1月)			
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		
メキシコ	2,212.2	32.6	828.3	37.9	メキシコ	1,027.3	31.0	
日本	1,344.0	19.8	393.1	18.0	日本	599.9	18.1	
コロンビア	743.7	11.0	299.0	13.7	韓国	336.7	10.2	
韓国	617.4	9.1	144.3	6.6	コロンビア	332.7	10.1	
台湾	241.6	3.6	スペイン	115.5	5.3	スペイン	235.8	7.1
その他	1,617.3	23.9	その他	407.8	18.6	その他	776.6	23.5
合計	6,776.2	100.0	合計	2,187.9	100.0	合計	3,308.9	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

< ブラジル > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 3.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 3.7%減となるものの、過去5年平均(119.0 百万トン)から 10.1%増の 131.0 百万トンと史上3番目の見込み。2024/25 年度は、2023/24 年度から 14.3%増の 136.0 百万トンと史上2番目の見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.2.10)によれば、マツト・グロソ州では、前作である大豆の収穫が例年より早いペースで進展しているため冬とうもろこし(第2期作)に十分な作付面積が確保されるとみられる。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.2.12)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の減少を受け前年度から 1.9%減の 138.4 百万トンの見込み。作付期別には、夏とうもろこし(第1期作)の実産量は、前年度から 7.1%増の 26.7 百万トンの見込み。作付進捗率は、2月の第1週に 97.1%に達した。南部では既に収穫が始まり、リオ・グランデ・ド・スール州の収穫進捗率は1月末時点で 33%となっている。また、冬とうもろこし(第2・3期作)の実産量は、前年度から 3.8%減の 111.7 百万トンの見込み。冬とうもろこしの大部分を占める第2期作の作付進捗率は、2月の第1週に 21.6%に達し、マツト・グロソ州では 37.1%となっている。同州では、適切な降水量や土壌水分量により作柄は良好とみられる(図)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、エタノール向けとうもろこしの国内需要の高まりにより、前年度から 2.7%増の 96.5 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 3.6%増の 43.0 百万トンとなる見込み。また、CONAB によれば、2025/26 年度の実輸出量は、良好な生産量に支えられ、前年度から 11.7%増の 46.5 百万トンとなる見込み。2024/25 年度の実輸出量は、国内供給量の増加に加え世界的な需要の増加を受け 41.6 百万トンとなる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(3,676.3 百万トン)に比べ 9.3%増の 4,018.5 百万トン。輸出先国別には、イラン 861.0 百万トン(21.4%)、エジプト 699.6 百万トン(17.4%)、ベトナム 481.6 百万トン(12.0%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加等を受け前年度から 65.2%減、過去5年平均(7.5 百万トン)から 50.7%減の 3.7 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 5.2 ポイント減の 2.6%となる見込み。

とうもろこし—ブラジル

(夏とうもろこしは、概ね8～翌年1月に作付けされ、2～6月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1～3月に作付けされ、6～10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	119.0	136.0 (141.2)	131.0 (138.4)	- (▲0.4)	▲3.7 (▲1.9)
消費量	84.0	94.0 (90.6)	96.5 (94.6)	- (▲0.03)	2.7 (4.4)
うち飼料用	62.5	66.0 …	66.0 …	- …	- …
輸出量	38.3	41.5 (41.6)	43.0 (46.5)	- (-)	3.6 (11.7)
輸入量	1.7	1.8 (1.8)	1.6 (1.7)	- (-)	▲8.6 (▲7.9)
期末在庫量	8.3	10.6 (12.7)	3.7 (11.8)	- (▲0.3)	▲65.2 (▲7.3)
期末在庫率	6.8%	7.8% (9.6%)	2.6% (8.3%)	- (▲0.2)	▲5.2 (▲1.3)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	21.65	22.30 (21.84)	22.60 (22.53)	- (▲0.19)	1.3 (3.1)
単収(t/ha)	5.50	6.10 (6.46)	5.80 (6.15)	- (0.03)	▲4.9 (▲4.9)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(10 February 2026)

CONAB「Graos」(12 February 2026) ※()書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図 ブラジルのクロープカレンダー(中部から南部)



資料:CONAB「Graos」(2026.2.12)をもとに農林水産省で作成

表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

国名	2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)		2023/24年度 (2024年3月～2025年1月)		2024/25年度 (2025年3月～2026年1月)			
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		
エジプト	601.1	15.7	564.7	15.4	861.0	21.4		
イラン	535.7	14.0	474.0	12.9	699.6	17.4		
ベトナム	450.9	11.8	443.8	12.1	481.6	12.0		
韓国	243.3	6.4	243.3	6.6	サウジアラビア	216.9	5.4	
日本	214.3	5.6	214.3	5.8	中国	190.4	4.7	
その他	1,772.8	46.4	その他	1,736.2	47.2	その他	1,568.9	39.0
合計	3,818.2	100.0	合計	3,676.3	100.0	合計	4,018.5	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

< アルゼンチン > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.0%増、過去5年平均(49.1 百万トン)から 7.9%増の 53.0 百万トンとなる見込み。病害虫のヨコバイによる被害が改善したことを受け 2025/26 年度は作付面積が回復する見込み。

同「Grain and Feed Update」(2026.1.23)によれば、12 月下旬から1月初旬にかけて、アルゼンチン中部で降雨量が減少し気温が上昇したことで、生産量への悪影響が懸念されている。同「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2026.2.10)によれば、2月上旬には、地域によっては降雨がもたらされたものの、多くの主要生産地域では依然として水分不足が続いている。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の月報(2026.1.22)によれば、作付進捗率は 95%と最終段階を迎えている。生育段階は 53%が出芽期～生長期、19%が開花期、28%が登熟期にある。作柄は、約 12%が非常に良好、79%が良好、6%が平年並み、3%が不良となっている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.8%増の 16.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 25.4%増の 37.0 百万トンとなる見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、輸出量の増加は、輸出可能な供給量が増加し米国やブラジルに対する競争力が高まることによる。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年 3～12 月の輸出量は、前年同期(3,113.3 百万トン)に比べ 15.9%減の 2,619.7 百万トン。輸出先国別には、ベトナム 481.0 百万トン(18.4%)、ペルー 401.0 百万トン(15.3%)、マレーシア 275.7 百万トン(10.5%)の順となっている(表)。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、とうもろこしの輸出税を 9.5%から 8.5%に引き下げた。これは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸出量の増加等を受け前年度から 10.5%減となるものの、過去5年平均(3.9 百万トン)からは 52.8%増の 5.9 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 3.4 ポイント減の 11.0%となる見込み。

とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね 3～8月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	51.6	50.0	53.0 (59.3)	-	6.0
消費量	15.2	16.4	16.7 (20.9)	-	1.8
うち飼料用	11.0	12.0	12.3 (15.9)	-	2.5
輸出量	36.3	29.5	37.0 (38.2)	-	25.4
輸入量	0.01	0.01	0.01 (0.001)	-	-
期末在庫量	2.5	6.6	5.9 (2.3)	-	▲ 10.5
期末在庫率	4.8%	14.3%	11.0% (3.9%)	-	▲ 3.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.73	6.90	7.50 (8.50)	-	8.7
単収(t/ha)	6.68	7.25	7.07 (6.98)	-	▲ 2.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

写真 サンタフェ州の圃場の様子(2026.1.31 撮影)



9 月前半に作付けされ、成熟期を迎えている圃場。収穫は 3 月前半を予定している。

撮影者: José Daniel Peloni

表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月～12月)			2024/25年度 (2025年3月～12月)		
国名	輸出量 (百万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (百万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (百万トン)	シェア (%)
ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	609.0	19.6	ベトナム	481.0	18.4
ペルー	433.1	11.9	ペルー	374.9	12.0	ペルー	401.0	15.3
マレーシア	333.6	9.2	マレーシア	283.4	9.1	マレーシア	275.7	10.5
韓国	282.2	7.8	韓国	282.2	9.1	アルジェリア	227.2	8.7
アルジェリア	280.1	7.7	サウジアラビア	226.4	7.3	サウジアラビア	197.0	7.5
その他	1,628.2	44.9	その他	1,337.4	43.0	その他	1,037.8	39.6
合計	3,624.9	100.0	合計	3,113.3	100.0	合計	2,619.7	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成

< ウクライナ > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 8.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.2% 増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン)からは 13.8%減の 29.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」(2025.12.9)によれば、湿潤な秋の天候により土壌水分量と湿度が上昇し穀粒の乾燥が妨げられ、収穫は大幅に遅れている(図)。現地情報会社によれば、前年度は 12 月までにはほぼ収穫が終了したものの、2025/26 年度の収穫は遅れている(2026 年1月 22 日時点の収穫進捗率 92%)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、飼料消費の減少を受け前年度から 4.6%減の 6.2 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、これまでの輸出の低迷を受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加等を受け前年度から 9.9%増の 22.0 百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(956.6 万トン)に比べ 18.0%減の 784.8 万トン。輸出先国別には、トルコ 197.7 万トン(25.2%)、イタリア 183.7 万トン(23.4%)、スペイン 68.0 万トン(8.7%)の順となっている(表)。USDA「Grain and Feed Quarterly」(2026.2.4)によれば、とうもろこしの水分量が過剰で、出荷前に乾燥機に通す必要があり、輸出遅延が生じた。

2022 年6月より適用されてきた EU のウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置が 2025 年6月 5日に適用期限を迎え失効し、欧州委員会は、6月 6日以降、深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)に基づく関税割当を適用している。6月 30 日には欧州委員会とウクライナが DCFTA の下で新たな貿易措置に合意したことが発表され、とうもろこしの年間の関税割当量は、現行の 65 万トンから 100 万トンに拡大された。EU とウクライナの連合委員会は 10 月 14 日に上記の合意を承認し、10 月 29 日に発効となった。期限は 2028 年末までとされ、同年に見直しを検討される予定。現地情報会社によれば、とうもろこしについては、EU の関税率は0%であるため、割当量の増減による影響はないものとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 96.4%増、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2.5 百万トン)からは 34.4%減の 1.7 百万トンとなる見込み。2025/26 年度の期末在庫率は、前年度から 2.7 ポイント増の 5.9%となる見込み。

とうもろこしーウクライナ

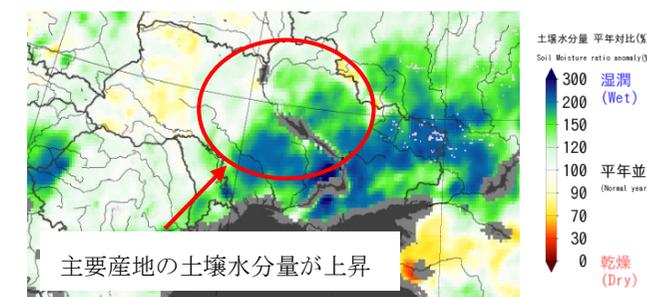
(概ね4～5月に作付けされ、8～11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	32.5	26.8	29.0 (30.5)	-	8.2
消費量	5.5	6.5	6.2 (6.1)	0.2	▲ 4.6
うち飼料用	4.6	5.4	5.0 (4.7)	0.2	▲ 7.4
輸出量	29.5	20.0	22.0 (23.5)	▲ 1.0	9.9
輸入量	0.01	0.02	0.01 (0.002)	-	▲ 50.0
期末在庫量	0.5	0.8	1.7 (2.0)	0.8	96.4
期末在庫率	1.5%	3.2%	5.9% (6.8%)	2.9	2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	4.20	4.10	4.20 (4.20)	-	2.4
単収(t/ha)	7.74	6.54	6.90 (7.26)	-	5.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 ウクライナの土壌水分量年対比(2025 年 11 月)



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
トルコ	568.8	28.4	トルコ	186.2	19.5	トルコ	197.7	25.2
イタリア	273.6	13.7	スペイン	150.7	15.8	イタリア	183.7	23.4
スペイン	240.7	12.0	イタリア	149.5	15.6	スペイン	68.0	8.7
オランダ	199.1	10.0	オランダ	115.6	12.1	チェコ	47.0	6.0
エジプト	162.5	8.1	エジプト	85.8	9.0	エジプト	46.9	6.0
その他	556.1	27.8	その他	268.8	28.1	その他	241.6	30.8
合計	2,000.8	100.0	合計	956.6	100.0	合計	784.8	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 2.1%増、過去5年平均(278.8 百万トン)から 8.0%増の 301.2 百万トンと、史上最高の見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度は、南東部(四川省を含む)の一部で異常な高温乾燥に見舞われたものの、主要生産地の東北部では良好な天候に恵まれ生産量が増加した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.6%増の 321.0 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 339.6%増の 8.0 百万トンとなる見込み。同「Grain and Feed Update」(2025.7.2 及び 2026.1.27)によれば、前年度は、報復関税などの貿易政策の変更や国内農家の利益を守るための輸入抑制等により輸入量が大きく減少したが、2025/26 年度は、国内産とうもろこしの品質懸念や米国産農産物に対する報復関税の撤廃により輸入量が増加する見込み(図)。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10~12 月の輸入量は、前年同期(88.9 万トン)に比べ 92.7%増の 171.4 万トン。輸入先国別には、ブラジル 135.8 万トン(79.2%)、ミャンマー19.2 万トン(11.2%)、ロシア 12.4 万トン(7.2%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 12 月号」によれば、12 月の国内価格は、堅調な飼料用需要等により、前月(2,320 元/トン)から上昇し 2,420 元/トン。

中国国務院関税税則委員会は、2025 年 10 月末の米中経済貿易協定の合意を踏まえ、税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち5月 14 日から停止されてきた 24%の適用を 11 月 10 日から更に1年間停止(同第 10 号)し、同第2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これにより米国産とうもろこしに課す追加関税は 10%となった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 6.1%減、過去5年平均(204.8 百万トン)から 12.0%減の 180.2 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.6 ポイント減の 56.1%となる見込み。

とうもろこしー中国

(春とうもろこしは、概ね2~4月に作付けされ、7~9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4~6月に作付けされ、9~10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

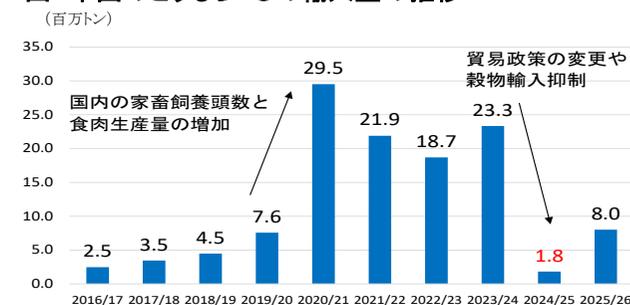
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月~26年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	288.8	294.9	301.2 (301.2)	-	2.1
消費量	307.0	316.0	321.0 (312.2)	-	1.6
うち飼料用	225.0	234.0	239.0 (210.0)	-	2.1
輸 出 量	0.0	0.0	0.02 (0.1)	-	-
輸 入 量	23.3	1.8	8.0 (6.0)	-	339.6
期末在庫量	211.2	191.9	180.2 (179.9)	-	▲ 6.1
期末在庫率	68.8%	60.7%	56.1% (57.6%)	-	▲ 4.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	44.22	44.74	44.96 (45.00)	-	0.5
単収(t/ha)	6.53	6.59	6.70 (6.69)	-	1.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 中国のとうもろこしの輸入量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度 (2024年10月~2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月~12月)			2025/26年度 (2025年10月~12月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	47.5	53.4	ブラジル	135.8	79.2
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	14.5	16.3	ミャンマー	19.2	11.2
ロシア	36.8	20.2	ミャンマー	13.2	14.8	ロシア	12.4	7.2
ミャンマー	22.8	12.5	ラオス	6.1	6.8	ラオス	4.0	2.3
ラオス	6.4	3.5	ロシア	4.8	5.4	ベルー	0.0	0.0
米国	3.9	2.1	米国	1.9	2.1	-	-	-
その他	2.3	1.3	その他	1.0	1.1	-	-	-
計	182.3	100.0	計	88.9	100.0	計	171.4	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・カンボジア等で上方修正され、前月から上方修正された。

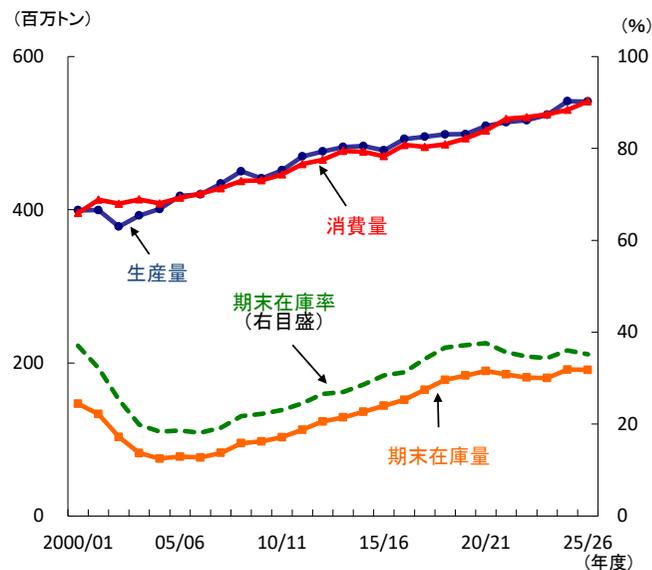
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・日本、中国等で上方修正されたものの、ミャンマー等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ミャンマー等で上方修正されたものの、タイ等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省にて作成

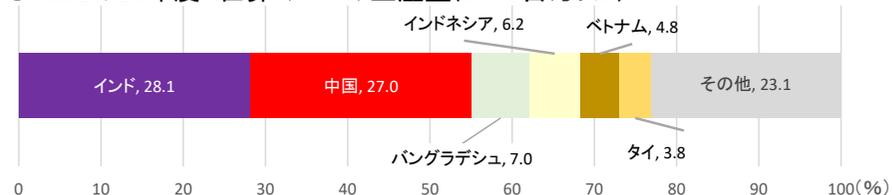
◎世界のコメ需給

(単位:百万精米トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	524.0	541.7	541.3	0.1	▲ 0.1
消費量	524.7	530.5	541.7	▲ 0.3	2.1
輸出量	56.8	61.3	63.3	▲ 0.2	3.3
輸入量	53.5	57.9	60.0	▲ 0.1	3.7
期末在庫量	180.2	191.3	190.9	0.5	▲ 0.2
期末在庫率	34.3%	36.1%	35.2%	0.1	▲ 0.8

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 February 2026)

○ 2025/26年度 世界のコメの生産量(541.3百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸出量(63.3百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸入量(60.0百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< タイ > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度から 0.28 百万ヘクタール減少(前年度比 2.5%減)することを受け、前年度から 2.1%減の 20.4 百万トンの見込み。単収は過去最高の 2.86 トン/ヘクタールを維持する見込み。

タイ農業協同組合省農業経済局(2026.1)によれば、2025/26 年度の乾季米の作付面積は、前年度に比べ 2.1%減の 2.06 百万ヘクタールと予測されている。同省「農業災害状況報告」(2026.2.6)によれば、乾季米の予測作付面積の内、2月4日時点で約 88%(1.82 百万ヘクタール)作付けが行われた。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.1)によれば、乾季米は現在、分けつ期を迎え、総作付面積は、コメ価格の下落及び 2025 年 12 月まで一部地域で洪水が続いたことによる作付作業の遅延を主な要因として、前年度に比べ約 2%減と予測されている。2026 年 1 月時点の作付面積は、約 1.10 百万ヘクタールと推計され、国家計画の約 52%を占める。作付面積は減少したものの、適切な灌漑整備と十分な天然水により、生育条件は良好な状態を維持している。現状予測では、単収は前年度と比べわずかな増加が見込まれている。

【貿易情報・その他】USDA「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、2025/26 年度の輸出量は、タイ米の輸出価格が、パーツ高及び国内価格の上昇を主要因として、他のアジアのコメ輸出国に比べ高いことから、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、前年度から 8.4%減の 7.2 百万トンの見込み。同「Grain and Feed Monthly」(2026.2.2)によれば、前年度からの繰越在庫の増加や世界市場におけるベトナム、インド及びパキスタン等との競争激化を受け、前年度比 5%減を見込むものの、高品質白米や香り米品種に対する強固な需要に支えられ、輸出実績は堅調に推移するとも見込んでいる。

タイ関税局によれば、2024/25 年度の輸出量は、前年度(998.7 万トン)に比べ 20.9%減の 790.1 万トンで、輸出先国別には、イラク 100.1 万トン(12.7%)、南アフリカ 87.6 万トン(11.1%)、米国 81.8 万トン(10.4%)の順となっている(表)。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は 9.6 万トンと大幅に減少し前年度に比べ 93%減となった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 21.8%増の 3.4 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 3.4 ポイント増の 16.9%となる見込み。

コメータイ

夏期の雨季作(5~10 月作付け、同年7月~翌年5月収穫)と冬期の乾季作(11 月~翌年4月作付け、翌年2~10 月収穫)で行われる。主にインディカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年1月~26年12月)			
			予測値、OはIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	20.0	20.8	20.4 (20.4)	-	▲ 2.1	
消費量	12.3	12.5	12.7 (12.8)	-	▲ 1.2	
輸出入量	9.9	7.9	7.2 (7.1)	▲ 0.3	▲ 8.4	
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-	
期末在庫量	2.2	2.8	3.4 (3.4)	0.3	21.8	
期末在庫率	10.0%	13.5%	16.9% (17.2%)	1.9	3.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.65	11.08	10.80 (10.80)	-	▲ 2.5	
単収(噸/ha)	2.85	2.85	2.86 (1.89)	-	0.4	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米t/ha)

写真 タイ北部(チェンライ県)の圃場



ジャポニカ米(DOA2)の苗の作付作業の様子(1月30日撮影)

表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年1月~12月)			2024/25年度 (2025年1月~12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	134.3	13.4	イラク	100.1	12.7
イラク	99.7	10.0	南アフリカ	87.6	11.1
米国	84.8	8.5	米国	81.8	10.4
南アフリカ	83.3	8.3	中国	65.5	8.3
フィリピン	61.7	6.2	セネガル	28.7	3.6
セネガル	48.7	4.9	マレーシア	27.8	3.5
その他	486.1	48.7	その他	398.6	50.4
計	998.7	100.0	計	790.1	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

コメー米国

長粒種の生産量は7割、中・短粒種は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

(単位:百万精米トン)

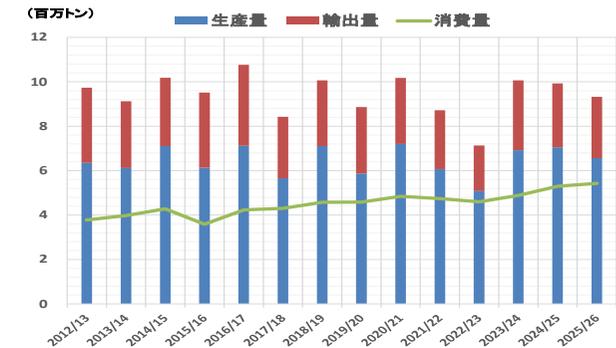
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.9	7.1	6.6	-	▲ 7.0
消費量	4.9	5.3	5.4	-	2.5
輸出量	3.2	2.9	2.8	▲ 0.1	▲ 3.8
輸入量	1.4	1.6	1.5	▲ 0.03	▲ 3.2
期末在庫量	1.3	1.7	1.6	0.03	▲ 6.4
期末在庫率	15.8%	20.9%	19.5%	0.5	▲ 1.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.16	1.16	1.11	-	▲ 4.3
単収(粍t/ha)	8.56	8.69	8.45	-	▲ 2.8

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 February 2026)

図 米国のコメの生産量・輸出量・消費量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 米国のコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～12月)			2025/26年度 (2025年8月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	68.6	23.5	メキシコ	31.9	24.9	ハイチ	15.1	17.2
日本	39.4	13.5	ハイチ	14.0	11.0	日本	14.2	16.3
ハイチ	28.6	9.8	日本	12.8	10.0	メキシコ	10.5	12.0
ホンジュラス	27.4	9.4	ホンジュラス	10.3	8.0	韓国	10.4	11.9
イラク	22.0	7.6	韓国	8.1	6.4	ホンジュラス	7.5	8.6
韓国	13.4	4.6	ニカラグア	7.3	5.7	イラク	4.4	5.0
その他	91.9	31.6	その他	43.3	33.9	その他	25.3	29.0
計	291.2	100.0	計	127.8	100.0	計	87.4	100.0

資料:USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2025/26年度の生産量は、前年度から7.0%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収及び収穫面積の減少を受け、前年度から7.0%減の6.6百万トンの見込み(図)。2025/26年度の収穫面積は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ4.3%減の1.11百万ヘクタールの見込み。

同「Crop Production」(2026.1.12)によれば、種類別生産量は、長粒種は4.9百万トンと前年度(5.5百万トン)から11%減の見込み。一方、中・短粒種は1.7百万トンと、前年度(1.6百万トン)から5.5%増の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸入量は、前月予測から0.03百万トン下方修正され、前年度から3.2%減の1.5百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、当該下方修正は、特にタイからの長粒種(香り米(ジャスミン米))の輸入ペースの鈍化を受けている。

USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度から3.8%減の2.8百万トンの見込み(図)。同「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、当該下方修正は、長粒種(玄米及び精米)の輸出減が予測され、長粒種玄米の最大輸出先のメキシコにおける貿易政策の転換や、パキスタンからのハイチ向け長粒種精米の輸出再開が影響している。

同「Exports Sales Query System」によれば、2025/26年度のうち2025年8～12月の輸出量は87.4万トンで、輸出先国別には、ハイチ15.1万トン(17.2%)、日本14.2万トン(16.3%)、メキシコ10.5万トン(12.0%)の順(表)。種類別には、長粒種は、輸出量56.1万トンで、輸出先国別には、ハイチ15.1万トン(国別シェア26.9%)、メキシコ8.4万トン(同15.0%)、ホンジュラス7.5万トン(同13.4%)。中・短粒種は、輸出量31.3万トンで、輸出先国別には、日本14.2万トン(国別シェア45.4%)、韓国10.4万トン(同33.1%)、メキシコ2.1万トン(同6.7%)。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.2.10)によれば、2024/25年度(2024年8月～翌年7月)の米国産米の対日輸出量は、30年の中で最高を記録した。日本の輸入増は、国内供給量の低下、国内価格の高騰、日米間の枠組み合意等の要因が作用している。同「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、米国は日本向けに主にカリフォルニア州サクラメント・バレーで生産される中・短粒種を輸出している。

同「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、2025/26年度の期末在庫量は、輸入量の変動を受け、前月予測から0.03百万トン上方修正され、前年度から6.4%減の1.6百万トンの見込み。

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.7%増の 146.3 百万トン(精米ベース)となる見込み。同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、2025/26 年度の実生産量は、中国国家统计局による単収増の公表を受け、前年度(145.3 百万トン)と比べ 0.7%増の 146.3 百万トン(精米ベース)となる見込み(図)。晩稲の収穫は 2025 年 12 月下旬に終了している。

中国国家统计局「2025 年糧食生産量データ」(2025.12.12)によれば、2025 年の稲の作付面積は、前年(29.01 百万ヘクタール)と比べ同水準の 29.01 百万ヘクタール。単収は、前年(7.15 トン/ヘクタール)と比べ増加し 7.21 トン/ヘクタール。生産量は、前年(207.5 百万トン)から増加し 209.0 百万トン(粳米ベース)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、飼料及び工業用への古米在庫の放出増を要因として前年度から 1.4%増の 147.0 百万トンとなる見込み(図)。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、国際市場におけるコメ価格の持続的な下落により国内コメ価格との価格差が拡大し、ミャンマー、タイ及びベトナムからの輸入米増の予測を受け前年度から 32.5%増の 3.1 百万トンの見込み(図)。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 7~12 月の輸入量は、前年同期(90.4 万トン)に比べ 84.8%増の 167.1 万トンとなっている。輸入先国別には、ミャンマー 73.2 万トン(43.8%)、タイ 35.4 万トン(21.2%)、ベトナム 28.5 万トン(17.1%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、コートジボワール、ギニアビサウ及びリビアを含むアフリカ市場における競争力のある中粒種の需要拡大を背景に、前年度から 65.2%増の 1.9 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 7~12 月の輸出量は、前年同期(55.2 万トン)に比べ 104.2%増の 112.8 万トンとなっている。輸出先国別には、トルコ 12.5 万トン(11.1%)、カメルーン 8.3 万トン(7.4%)、パプアニューギニア 7.4 万トン(6.6%)、日本 7.3 万トン(6.5%)の順となっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.5%増の 105.0 百万トンの見込み(図)。同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、長雨による品質の低下、特に河南省での発芽率の悪化を受け、高品質米の供給が減少し一部地域でコメの買付価格が上昇している。その結果、備蓄基準を満たさない玄米の市場供給が増加し、期末在庫は 105.0 百万トンを上回るとも見込まれている。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

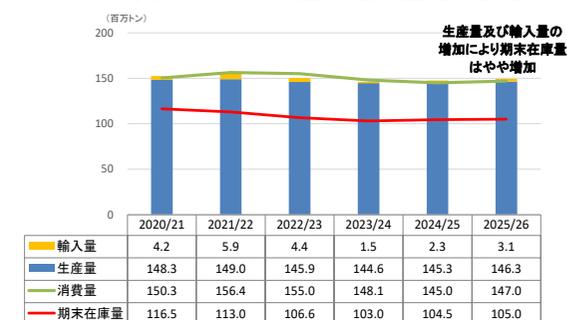
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月~26年6月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	144.6	145.3	146.3 (146.0)	-	0.7
消費量	148.1	145.0	147.0 (145.7)	0.1	1.4
輸出量	1.6	1.2	1.9 (1.9)	-	65.2
輸入量	1.5	2.3	3.1 (2.8)	0.1	32.5
期末在庫量	103.0	104.5	105.0 (103.4)	-	0.5
期末在庫率	68.8%	71.5%	70.5% (70.1%)	▲ 0.1	▲ 1.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	28.95	29.01	29.00 (29.00)	-	▲ 0.02
単収(噸/ha)	7.14	7.15	7.21 (5.03)	-	0.8

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米t/ha)

図 中国のコメ生産量と輸入量等の推移



資料: USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月~2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月~12月)			2025/26年度 (2025年7月~12月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ミャンマー	67.4	28.9	ミャンマー	36.3	40.2	ミャンマー	73.2	43.8
タイ	56.1	24.0	タイ	23.5	26.0	タイ	35.4	21.2
ベトナム	49.6	21.3	パキスタン	12.1	13.4	ベトナム	28.5	17.1
インド	24.1	10.3	ベトナム	6.6	7.3	カンボジア	11.2	6.7
パキスタン	20.7	8.9	インド	5.6	6.2	インド	9.0	5.4
カンボジア	11.7	5.0	ラオス	3.3	3.6	パキスタン	7.2	4.3
その他	3.8	1.6	その他	3.0	3.3	その他	2.6	1.6
合計	233.5	100.0	合計	90.4	100.0	合計	167.1	100.0

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

< インド > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 1.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%増、過去5年平均(135.5 百万トン)から 12.2%増の 152.0 百万トンと史上最高の見込み(図)。10 年連続の記録更新が見込まれている。

同「Grain and Feed Update」(2025.12.4)によれば、9～10 月の遅い時期の降雨により一部の州でカリフ米の収穫が遅れた。一方、ラビ作物は 2025 年のモンスーンが平年を上回る降雨量となったため、土壌水分量が良好な状態で作付けが順調に開始された。

インド農業・農民福祉省によれば、2025/26 年度のラビ米の作付面積は、2026 年1月 23 日時点で前年同期(2.9 百万ヘクタール)から 6.2%増の 3.1 百万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.8%増の 127.0 百万トンと予測されている(図)。同「Grain and Feed Update」(2025.12.4)によれば、当該増加は、インド政府が実施するエタノール製造業者向けプログラムにおける、政府余剰米在庫の需要増が要因となっている。また生産量の増加により、政府は食料安全保障法に基づく公的食料配給制度(PDS)の継続実施が可能となっており、政府は PDS により市場からコメ等を調達し、低所得世帯(8.14 億人以上)に無償又は低価格で配給している。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 9.5%増の 25.0 百万トンの見込み(図)。

インド輸出入統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～11 月の輸出量は、314.5 万トンと前年同期(367.6 万トン)に比べ 14.4%減となっている。輸出先国別には、バングラデシュ 25.5 万トン(8.1%)、ベナン 24.3 万トン(7.7%)、コートジボワール 20.2 万トン(6.4%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測及び前年度からの変更はなく 48.0 百万トンとなるが、政府が望む在庫水準は大幅に上回る見込み。同「Grain and Feed Update」(2025.12. 4)によれば、2025/26 年度期末在庫は、2025 年 10 月1日時点の政府基準在庫(10.3 百万トン)の4倍以上となり、国内流通政策に大きな変更がないことを前提に、増加が見込まれている。インド食料公社(Food Cooperation India)によれば、2026 年1月時点の期末在庫量は、30.9 百万トン(精米)と前年同期(29.09 百万トン)に比べ 6.2%増の見込み。

コメ・インド

カリフ米: 雨季/モンスーン期(5～10 月)に栽培。
ラビ米: 冬季の 11 月～翌3月に栽培。
夏季米: 3～6月に栽培。

(単位: 百万精米トン)

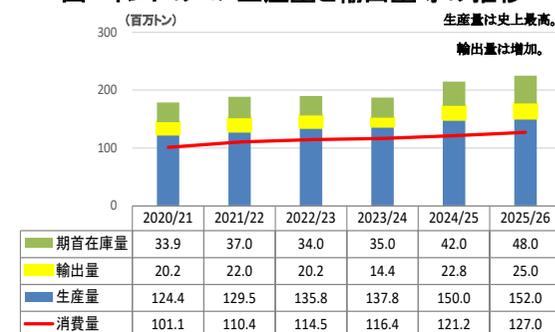
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	137.8	150.0	152.0 (153.0)	-	1.3
消費量	116.4	121.2	127.0 (125.2)	-	4.8
輸出量	14.4	22.8	25.0 (22.7)	-	9.5
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	42.0	48.0	48.0 (53.5)	-	-
期末在庫率	32.1%	33.3%	31.6% (36.2%)	-	▲ 1.8

(参考)

収穫面積(百万ha)	47.83	51.42	52.00 (51.50)	-	1.1
単収(kg/ha)	4.32	4.38	4.39 (2.97)	-	0.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米/ha)

図 インドのコメ生産量と輸出量等の推移



資料: USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～11月)			2025/26年度 (2025年10月～11月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベナン	216.7	9.4	ベナン	44.0	12.0	バングラデシュ	25.5	8.1
バングラデシュ	149.9	6.5	コートジボワール	30.8	8.4	ベナン	24.3	7.7
サウジアラビア	139.8	6.1	トーゴ	25.6	7.0	コートジボワール	20.2	6.4
ギニア	114.5	5.0	ギニア	21.9	6.0	ギニア	19.1	6.1
トーゴ	113.9	5.0	サウジアラビア	17.5	4.8	サウジアラビア	17.8	5.6
コートジボワール	111.2	4.8	ベトナム	17.5	4.7	ケニア	15.1	4.8
その他	1,454.8	63.2	その他	210.3	57.2	その他	192.6	61.2
計	2,300.8	100.0	計	367.6	100.0	計	314.5	100.0

資料: インド農業・加工食品輸出振興局(APEIDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から2.8%減の26.0百万トンの見込み。

ベトナム総統計局(2026.2.6)によれば、2026年(USDA:2025/26年度)の全国の冬春作の作付面積は、1月20日時点で、前年同期に比べ6.3%減の191万ヘクタールの見込み。この内、北部では、季節当初の厳しい寒さによる稲被害を回避するため、作付作業が後ろ倒しとなり、前年同期に比べ20.6%減の18.1万ヘクタールに留まった。また、南部では、カントー市、カマウ省、ドンタップ省、アンザン省等多くの地域で稲作と養殖を組み合わせた作付体系への転換が進み、前年同期に比べ4.5%減の173万ヘクタールとなった。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.1)によれば、ベトナム南部では、現在乾季米(冬春作)が作付段階にあり、主にメコンデルタ地域に集中している。現時点では順調だが、2026年第1四半期には、気温上昇、降雨量減少、塩害浸入による複合的な影響により、地域的に農業用水の逼迫が生じる可能性があり、これにより作物の定着及び初期生育への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から17.8%増の4.1百万トンと、過去最高となる見込み。

2025/26年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、インドやタイといった輸出国との競争激化が予測され前年度から2.0%減の7.9百万トンとなる見込み。

ベトナム税関総局によれば、2025/26年度のうち2026年1月の輸出量は、651.4万トンと前年同期(547.4万トン)に比べ19.0%増。輸出先国別には、フィリピン331.8万トン(50.9%)、中国118.2万トン(18.1%)、ガーナ52.7万トン(8.1%)の順(表)。

USDA「Grain and Feed Quarterly」(2025.11.13)によれば、フィリピンは依然として最大の輸入先国であるものの、コートジボワール、ガーナ及び中国への輸出が大幅に増加し、市場多様化への努力が功を奏し、世界第2位のコメ輸出国の地位を維持している。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度に比べ19.6%減の2.1百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から1.6ポイント減の6.7%となる見込み。

コメベトナム

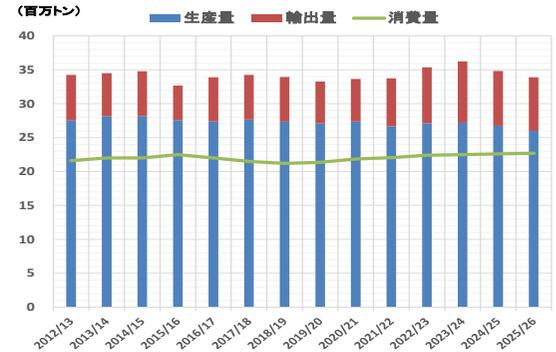
北部で概ね二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

(単位:百万精米トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年1月~26年12月)			
			予測値、0はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	27.2	26.8	26.0 (28.3)	-	▲ 2.8	
消費量	22.5	22.6	22.7 (23.2)	-	0.4	
輸出量	9.0	8.1	7.9 (8.4)	-	▲ 2.0	
輸入量	3.7	3.5	4.1 (3.5)	-	▲ 17.8	
期末在庫量	3.0	2.6	2.1 (3.4)	▲ 0.1	▲ 19.6	
期末在庫率	9.5%	8.3%	6.7% (10.6%)	▲ 0.3	▲ 1.6	
<small>(参考)</small>						
収穫面積(百万ha)	7.11	6.95	6.80 (7.12)	-	▲ 2.2	
単収(穀t/ha)	6.12	6.16	6.12 (3.97)	-	▲ 0.6	

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米t/ha)

図 ベトナムのコメ生産量と輸出量等の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年1月~12月)			2024/25年度 (2025年1月)			2025/26年度 (2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	422.1	46.7	フィリピン	224.1	40.9	フィリピン	331.8	50.9
インドネシア	125.7	13.9	コートジボワール	94.0	17.2	中国	118.2	18.1
マレーシア	71.9	8.0	ガーナ	59.3	10.8	ガーナ	52.7	8.1
ガーナ	61.3	6.8	トルコ	23.1	4.2	マレーシア	47.7	7.3
コートジボワール	48.3	5.3	中国	18.1	3.3	コートジボワール	11.0	1.7
中国	28.5	3.2	マレーシア	15.0	2.7	モザンビーク	9.3	1.4
その他	145.5	16.1	その他	113.6	20.8	その他	80.7	12.4
計	903.4	100.0	計	547.4	100.0	計	651.4	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

II 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ブラジル、パラグアイで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

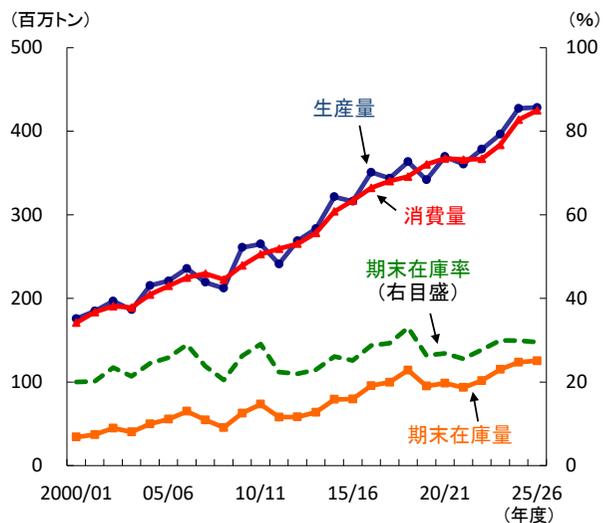
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ブラジル、パラグアイ、ベトナムで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 -

・前月予測からの変更はなく、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.2.10)をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

(単位:百万トン)

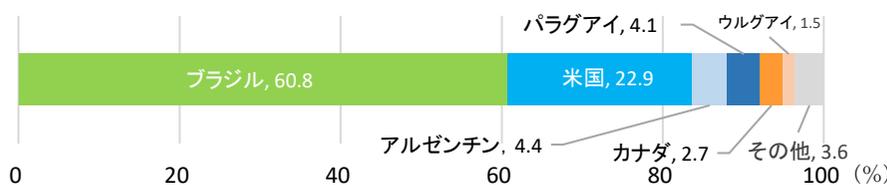
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	396.4	427.2	428.2	2.5	0.2
消費量	383.6	413.7	424.7	1.6	2.7
うち搾油用	331.2	359.2	368.0	1.6	2.5
輸出量	177.8	184.3	187.6	-	1.8
輸入量	178.4	179.5	186.0	▲ 0.1	3.6
期末在庫量	115.1	123.7	125.5	1.1	1.5
期末在庫率	30.0%	29.9%	29.5%	0.1	▲ 0.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 February 2026)

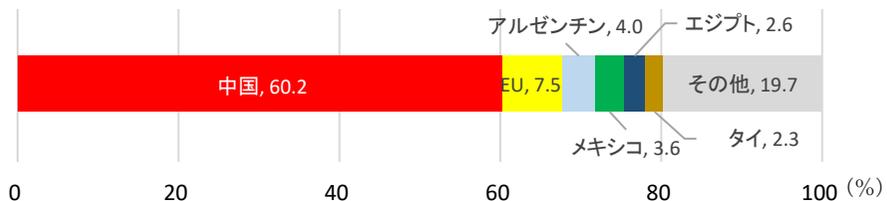
○ 2025/26年度 世界の大豆の生産量(428.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界の大豆の輸出量(187.6百万トン)



○ 2025/26年度 世界の大豆の輸入量(186.0百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.6%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 2.6%減の 116.0 百万トンの見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家がとうもろこしに作付けを切り替えたとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 5.6%増の 73.0 百万トンと史上最高の見込み。米国環境保護庁(EPA)は、6月13日、再生可能燃料基準制度(RFS)について、2026~27年の混合基準量案を公表した。バイオディーゼルは、2025年の33億5,000万ガロンに対して、2026年は56億1,000万ガロン、2027年は58億6,000万ガロンと過去最高の数量を設定した。報道情報によれば、2026年の義務量は、2026年3月までに最終決定される見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 16.3%減の 42.9 百万トンの見込み。国際穀物理事会(IGC)によれば、2月5日現在、米国産の輸出価格は、455ドル/トンと、前月(1月8日)から24ドル/トン上昇した。ブラジル産は前月から3ドル/トン上昇し413ドル/トン、アルゼンチン産は前月から28ドル/トン上昇し433ドル/トンとなった(図)。USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.2.10)によれば、中国による最近の購入、ドル安、バイオ燃料政策への期待感等を受け、米国産の輸出価格は、2か月ぶりの高値を記録した。一方、ブラジルの良好な作柄報告と天候条件が大豆の記録的な収穫への期待を高め、米国産とブラジル産の価格差が拡大した。同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26年度の輸出量のうち2025年9月~2026年1月の輸出量は、前年同期(3,449.8万トン)に比べ35.4%減の2,227.5万トン。輸出先国別には、中国453.0万トン(20.3%)、メキシコ266.5万トン(12.0%)、エジプト229.6万トン(10.3%)の順(表)。

報道情報によれば、10月末の米中協議後、米国側は、中国が2025年末までに米国産を1,200万トン購入することで合意したと発表した。1月中旬にこの買い付けを達成したとみられる。さらに、2月初旬の電話会談を受け、米国側は、今年度の米国産大豆の購入量を2,000万トンへ引き上げることを中国が検討していると明らかにした。なお、これらの買い手は国有企業とみられ、民間の搾油業者は安価な南米産を優先させている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸出量の減少等を受け前年度から 7.7%増、過去5年平均(8.0百万トン)から19.5%増の9.5百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から0.9ポイント増の8.2%となる見込み。

大豆—米国

(概ね5~6月に作付けされ、9~11月に収穫される。)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月~26年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	113.3	119.1	116.0	-	▲ 2.6
消費量	65.4	69.1	73.0	-	▲ 5.6
うち搾油用	62.2	66.6	69.9	-	▲ 5.1
輸出量	46.3	51.2	42.9	-	▲ 16.3
輸入量	0.6	0.8	0.5	-	▲ 31.6
期末在庫量	9.3	8.8	9.5	-	▲ 7.7
期末在庫率	8.3%	7.3%	8.2%	-	▲ 0.9

(参考)
 収穫面積(百万ha) 33.29 34.89 32.55 - ▲ 6.7
 単収(t/ha) 3.40 3.41 3.56 - ▲ 4.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
 「World Agricultural Production」(10 February 2026)

図 米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料:IGCのデータをもとに農林水産省で作成

表 米国の大豆の輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年9月~2025年8月)		2024/25年度 (2024年9月~2025年1月)		2025/26年度 (2025年9月~2026年1月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,232.5	44.7	1,818.2	52.7	453.0	20.3
メキシコ	498.5	10.0	244.2	7.1	266.5	12.0
エジプト	369.2	7.4	185.6	5.4	229.6	10.3
ドイツ	273.1	5.5	176.6	5.1	144.0	6.5
イタリア	210.0	4.2	143.5	4.2	115.2	5.2
その他	1,415.2	28.3	881.6	25.6	1,019.3	45.8
合計	4,998.7	100.0	3,449.8	100.0	2,227.5	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

< ブラジル > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、収穫面積及び単収の引上げを受け前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、前年度から 5.0%増の 180.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.2.12)によれば、2025/26 年度の実産量は、コメなどの他作物から収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加を受け前年度から 3.8%増の 178.0 百万トンと史上最高の見込み。収穫進捗率は、2月初旬時点で 17.4%と、平年並みの進捗となっている。主要生産州のマット・グロッソ州では、局所的に品質低下がみられるものの、豊富な降雨量や十分な日照等により、生育は概ね良好とみられる。粒の乾燥及び収穫が進捗しており、収穫進捗率は 46.8%に達した。単収も良好とみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、搾油用需要の引上げ等を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度から 5.5%増の 65.4 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル政府は、大豆油のインフレ懸念により 14%からの引上げが延期されていたバイオディーゼル混合率について、2025 年8月1日から 15%へ引き上げた。これにより化石燃料輸入量の減少、脱炭素化、農家の所得向上等が期待されている。報道情報によれば、3月に予定されているバイオディーゼル混合率 16%への引上げは、技術的な検証が完了していないため、延期される可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、中国との強固な貿易関係等を受け前年度から 10.5%増の 114.0 百万トンと史上最高の見込み(<中国>表及び図参照)。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(1,033.8 百万トン)に比べ 56.6%増の 1,618.5 百万トン。輸出先国別には、中国 1,387.2 百万トン(85.7%)、タイ 82.2 百万トン(5.1%)、スペイン 47.5 百万トン(2.9%)の順となっている(表)。報道情報(2026.2.9)によれば、1～2月には約 1,400 百万トンの輸出が見込まれているが、レアル高、輸送コスト上昇、世界的な供給増による国際価格の下落により農家が販売に消極的で、加工・輸出業者に販売した割合は総収穫量の 34～38%と、平年を下回っている。今後残りの大豆が市場に出回った場合、輸送コスト上昇や販売価格下落の可能性が指摘されている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 3.0%増、過去5年平均(32.0 百万トン)から 18.4%増の 37.9 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.2 ポイント減の 21.1%となる見込み。

大豆—ブラジル

(概ね9～12月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

年 度	2024/25 (見込み)		2025/26 (25年10月～26年9月)			
	2023/24	2024/25 (見込み)	予 測 値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	154.5	171.5 (171.5)	180.0 (178.0)	2.0 (1.9)	5.0 (3.8)	
消費量	58.3	62.0 (61.3)	65.4 (64.6)	1.0 (0.4)	5.5 (5.4)	
うち搾油用	54.4	58.0	61.0	1.0	5.2	
輸 出 量	104.2	103.1 (108.2)	114.0 (112.2)	- (0.4)	10.5 (3.7)	
輸 入 量	0.9	0.7 (1.0)	0.5 (0.5)	- (-)	▲31.5 (▲48.4)	
期末在庫量	29.7	36.8 (10.2)	37.9 (11.9)	1.0 (0.6)	▲3.0 (16.4)	
期末在庫率	18.3%	22.3% (6.0%)	21.1% (6.7%)	0.4 (0.3)	▲1.2 (0.7)	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.15	47.40 (47.35)	49.40 (48.43)	0.30 (▲0.24)	4.2 (2.3)	
単収(t/ha)	3.35	3.62 (3.62)	3.64 (3.68)	0.01 0.06	0.6 (1.5)	

資料:USDA(World Agricultural Supply and Demand Estimates)、
World Agricultural Production(10 February 2026)
CONAB(Grãos)(12 February 2026)※()書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

表 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～2025年1月)		2025/26年度 (2025年10月～2026年1月)			
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		
中国	7,968.8	77.3	中国	785.6	76.0	中国	1,387.2	85.7
スペイン	396.3	3.8	タイ	106.0	10.3	タイ	82.2	5.1
タイ	365.5	3.5	イラク	43.4	4.2	スペイン	47.5	2.9
トルコ	184.8	1.8	スペイン	34.4	3.3	パキスタン	26.3	1.6
イラン	146.3	1.4	ロシア	26.0	2.5	イラン	14.4	0.9
その他	1,252.1	12.1	その他	38.5	3.7	その他	60.8	3.8
合計	10,313.8	100.0	合計	1,033.8	100.0	合計	1,618.5	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

写真 マット・グロッソ州の大豆圃場(1月 23 日撮影)



10月11日に作付けされ、収穫は2月5日以降を予定。生産者は、単収を約4.6トン/ヘクタールと見込んでいます。

撮影者:Rafael Rohenkohl

< カナダ > 2025/26 年度の生産量は前年度から 10.7%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.2.18)によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 10.7%減の 6.8 百万トンの見込み(図)。

カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2025」(2025.12.4)によれば、州別の生産量は、マニトバ州では、収穫面積の増加を受け前年度から 12.3%増の 1.9 百万トンとなるものの、最大生産州のオンタリオ州では、前年度から 18.2%減の 3.6 百万トン、ケベック州では前年度から 15.6%減の 1.2 百万トンの見込み。各州とも単収が前年度を下回り、マニトバ州が 3.2%減、オンタリオ州が 11.8%減、ケベック州が 19.2%減の見込み。カナダ東部(オンタリオ州及びケベック州等)では、生育期間を通じて高温乾燥に見舞われ、大豆の作柄が大きく悪化した。

AAFC によれば、2026/27 年度の作付面積は、他作物の投入コスト上昇及び価格下落による収益性の低下によって、大豆栽培にシフトし、2025/26 年度から 2.6%増の 240 万ヘクタールの見込み。

【需要状況】AAFC によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要等の減少を受け前年度から 14.8%減の 2.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 3.2%減の 5.3 百万トンの見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 6.4%減となるものの、過去5年平均(4.7 百万トン)から 9.1%増の 5.1 百万トンの見込み。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～11 月の輸出量は、前年同期(274.9 万トン)に比べ 6.6%増の 293.1 万トン。輸出先国別には、中国 104.6 万トン(35.7%)、オランダ 37.1 万トン(12.7%)、アルジェリア 32.6 万トン(11.1%)の順となっている(表)。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け 0.1 百万トン上方修正、生産量の減少等を受け前年度から 17.6%減の 0.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 0.9 ポイント減の 6.7%となる見込み。

大豆－カナダ

(概ね5～6月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.0	7.6 (7.6)	6.8 (6.8)	- (-)	▲10.2 (▲10.7)
消費量	2.3	2.4 (2.5)	2.1 (2.1)	- (-)	▲12.5 (▲14.8)
うち榨油用	1.7	1.7 (1.7)	1.4 (1.7)	- (-)	▲15.2 (1.3)
輸 出 量	4.9	5.4 (5.4)	5.1 (5.3)	- (-)	▲6.4 (▲3.2)
輸 入 量	0.3	0.2 (0.3)	0.4 (0.5)	- (-)	44.6 (68.5)
期末在庫量	0.6	0.5 (0.6)	0.5 (0.5)	- (0.1)	▲8.8 (▲17.6)
期末在庫率	7.9%	6.8% (7.6%)	6.7% (6.7%)	- 1.3	▲0.04 (▲0.9)

(参考)

収穫面積(百万ha)	2.26	2.29 (2.29)	2.32 (2.32)	- (-)	1.3 (1.4)
単収(t/ha)	3.09	3.30 (3.32)	2.93 (2.93)	- (-)	▲11.2 (▲11.7)

資料:USDA「PS&D」(10 February 2026)
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(18 February 2026)※()書き

図 カナダの大豆の生産量と単収の推移

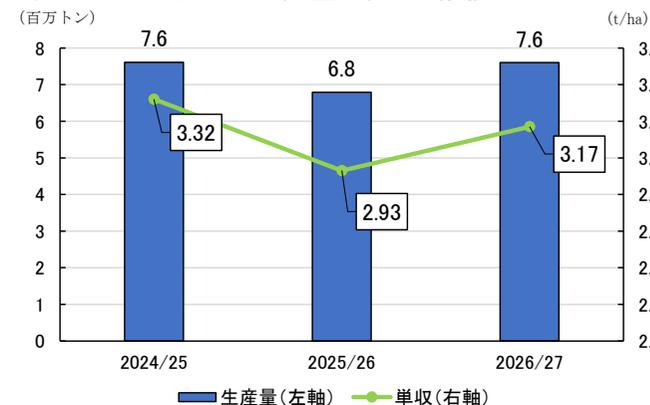


表 カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～11月)			2025/26年度 (2025年8月～11月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	104.3	19.0	中国	70.8	25.8	中国	104.6	35.7
イラン	76.5	14.0	イラン	42.3	15.4	オランダ	37.1	12.7
アルジェリア	54.9	10.0	アルジェリア	20.5	7.5	アルジェリア	32.6	11.1
米国	43.2	7.9	バングラデシュ	17.7	6.4	イラン	28.7	9.8
日本	40.0	7.3	イタリア	16.2	5.9	日本	13.1	4.5
インドネシア	31.8	5.8	日本	12.5	4.5	イタリア	12.4	4.2
その他	197.5	36.0	その他	94.9	34.5	その他	64.5	22.0
合計	548.2	100.0	合計	274.9	100.0	合計	293.1	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

大豆－中国

(概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	20.8	20.7	20.9 (20.9)	-	1.2
消費量	121.8	127.4	132.9 (135.1)	-	4.3
うち搾油用	99.0	103.5	108.0 (111.4)	-	4.3
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
輸 入 量	112.0	108.0	112.0 (113.0)	-	3.7
期末在庫量	43.3	44.5	44.4 (50.0)	-	▲ 0.2
期末在庫率	35.5%	34.9%	33.4% (37.0%)	-	▲ 1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.47	10.33	10.30 (10.42)	-	▲ 0.3
単収(t/ha)	1.99	2.00	2.03 (2.01)	-	1.5

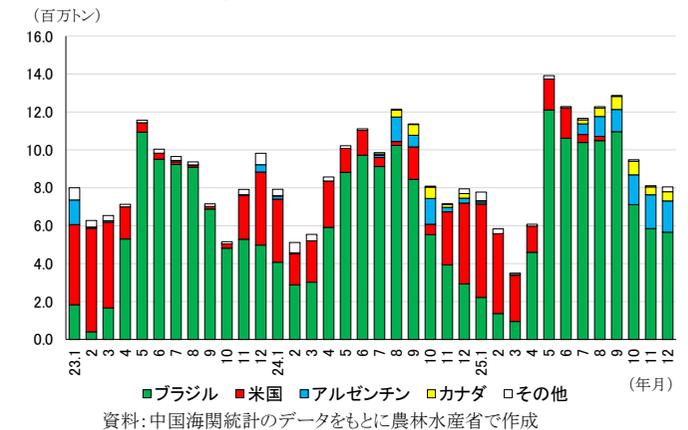
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～12月)		2025/26年度 (2025年10月～12月)	
	輸入量 (万吨)	シェア (%)	輸入量 (万吨)	シェア (%)	輸入量 (万吨)	シェア (%)
ブラジル	7,610.9	69.6	1,240.9	53.5	1,862.4	72.7
米国	2,438.9	22.3	758.8	32.7	499.5	19.5
アルゼンチン	476.6	4.4	186.9	8.1	161.5	6.3
ウルグアイ	244.3	2.2	99.8	4.3	21.9	0.9
カナダ	118.6	1.1	22.9	1.0	16.9	0.7
ロシア	45.0	0.4	8.7	0.4	1.2	0.0
その他	2.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
合計	10,936.3	100.0	2,318.3	100.0	2,563.4	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

図 中国の大豆の輸入量の推移(2023年1月～2025年12月)



資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加を受け前年度から 1.2%増の 20.9 百万トンと史上最高の見込み。

中国国家统计局「農村司司長魏鋒華解説糧食生産情況」(2025.12.12)によれば、2025 年の生産量は、前年から 1.3%増の 20.9 百万トンとなる見込み。これは、作付面積が 10.27 百万ヘクタールと前年から 0.6%減少したものの、単収が 2.04 トン/ヘクタールと前年より 1.9%増加することによる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 4.3%増の 132.9 百万トンと史上最高の見込み。

中国農業農村部「中国農業展望報告(2025-2034)」(2025.4)によれば、豚肉生産量の増加に伴い短期的には飼料用需要の増加が見込まれるものの 2034 年までの見通しでは、養豚施設の大規模化等により飼料用需要は今後安定的に推移する見込み。一方、飼料用大豆粕減量の取組が進み大豆粕需要は徐々に減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 3.7%増の 112.0 百万トンと、2023/24 年度と並び史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～12 月の輸入量は、前年同期(2,318.3 万吨)に比べ 10.6%増の 2,563.4 万吨。輸入先国別には、ブラジル 1,862.4 万吨(72.7%)、アルゼンチン 499.5 万吨(19.5%)、ウルグアイ 161.5 万吨(6.3%)の順(表、図)。

中国国务院関税税則委員会は、2025 年 10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ、税委会公告 2025 年第 4 号の追加関税 34%のうち 5 月 14 日から停止されてきた 24%の適用を 11 月 10 日から更に 1 年間停止(同第 10 号)し、同第 2 号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第 9 号)した。これにより米国産大豆に課す追加関税は 10%となった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 12 月号」によれば、国家糧食儲備局による大豆競売の開催回数が多く、いずれも高い価格(プレミアム付き)で落札されたことが市場心理を押し上げ、12 月の国内価格は 4,500 元/トンと、前月(4,460 元/トン)から上昇した。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 0.2%減となるものの、過去 5 年平均(34.8 百万トン)から 27.4%増の 44.4 百万トンと、史上 2 番目の見込み。期末在庫率は、前年度から 1.5 ポイント減の 33.4%となる見込み。

大豆—アルゼンチン

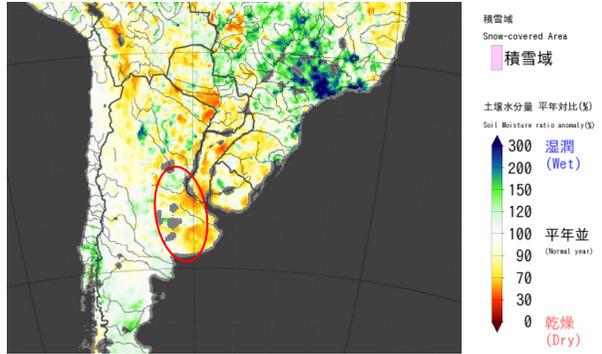
(大豆は、概ね 10~1月に作付けされ、3~7月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月~26年9月)		対前年度 増減率(%)
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	
生産量	48.2	51.1	48.5 (47.8)	-	▲ 5.1
消費量	43.8	50.2	48.2 (49.5)	-	▲ 4.1
うち搾油用	36.6	43.2	41.0 (43.0)	-	▲ 5.2
輸出品	5.1	7.9	8.3 (5.4)	-	4.8
輸入量	7.8	6.3	7.5 (6.0)	▲ 0.2	18.7
期末在庫量	24.1	23.4	22.9 (2.6)	0.1	▲ 1.9
期末在庫率	49.1%	40.2%	40.6% (4.7%)	0.1	0.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	16.37	17.46	16.50 (16.75)	-	▲ 5.5
単収(t/ha)	2.95	2.93	2.94 (2.85)	-	0.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 February 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 アルゼンチンの土壌水分量年対比
(2月1日~15日)



○ブエノスアイレス州、コルドバ州南部、サンタフェ州南部

資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

写真 サンタフェ州の大豆圃場(1月31日撮影)



撮影者:José Daniel Peloni

遅植え大豆は、12月下旬に作付けされ、収穫は4月下旬を予定している。高温乾燥により、単収は1トン/ヘクタールに達しない可能性がある。

< アルゼンチン > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 5.1%減の 48.5 百万トンの見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害によりとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は被害の改善により大豆からとうもろこしに作付けがシフトしたとみられる。

同「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2026.2.10)によれば、2月上旬、主要生産地のブエノスアイレス州、コルドバ州南部、サンタフェ州では、散発的な降雨により水不足が緩和されたものの、未だ解消には至っていない(図)。また、遅植え大豆を中心に影響を受け、降雨量が改善されない場合、単収の減少が見込まれている。

ブエノスアイレス穀物取引所(2026.2.12)によれば、早植え大豆は、高温乾燥の影響を受け、主要生産州のサンタフェ州南部等では単収の低下が見込まれるものの、その他の地域では降雨を受け、「不良~並」の割合は前週から 20%から 12%に減少し、「良好」が 38%、「非常に良好」が 45%、「優良」が5%となった。生育段階は 67%が莢伸長期、残りが子実肥大初期を迎えている。今後数週間で適切な降雨となれば、単収は、前年度並みかそれ以上になる可能性がある。遅植え大豆は、1月の降雨不足の影響をより受けている。生育段階は、約 30%が開花期、残りは莢伸長期を迎えており、降雨のあった地域では単収の減少は限定的となる見込みだが、水不足の地域では生育に悪影響がみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の減少等を受け前年度から 4.1%減の 48.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、輸入鈍化を受け前月予測から 0.2 百万トン下方修正されるものの、同国への大豆主要供給国であるパラグアイの生産量増加等を受け前年度から 18.7%増の 7.5 百万トンの見込み。2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、9月に輸出税が一時的に撤廃されたこと等を受け前年度から 4.8%増の 8.3 百万トンの見込み。輸出税撤廃時に、中国が大量に購入したとみられる。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、大豆の輸出税を 26%から 24%に引き下げた。政府は、9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、元の税率である 26%に戻っていた。これは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、期首在庫量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、生産量の減少等を受け前年度から 1.9%減、過去5年平均(22.6 百万トン)から 1.5%増の 22.9 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 0.4 ポイント増の 40.6%となる見込み。

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について (2025/26年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	25年6月～26年5月	25年9月～26年8月	25年8月～26年7月	25年9月～26年8月
カナダ	25年8月～26年7月			25年8月～26年7月
豪州	25年10月～26年9月		26年3月～27年2月	
EU	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
中国	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月
ロシア	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		25年9月～26年8月
ウクライナ	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
ブラジル		26年3月～27年2月	26年4月～27年3月	25年10月～26年9月
アルゼンチン	25年12月～26年11月	26年3月～27年2月		25年10月～26年9月
タイ			26年1月～12月	
インド	25年4月～26年3月		25年10月～26年9月	
ベトナム			26年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2025/26年度は、米国の小麦では2025年6月～2026年5月、ブラジルのとうもろこしでは2026年3月～2027年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国

華氏→摂氏： $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$

(参考3)各国のクロープカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位: 百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
中国 	<div style="border: 1px solid green; padding: 2px;">Market year</div> 冬小麦: 播種(12月) → 収穫(6月) 春小麦: 播種(4月) → 収穫(8月)												140 (17.5%)	1 (0.5%)	0.7%												
EU 	冬小麦: 播種(9月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												122 (15.3%)	27 (12.9%)	22%												
インド 	冬小麦: 播種(11月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												113 (14.2%)	0.2 (0.1%)	0.2%												
ロシア 	冬小麦: 播種(9月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												82 (10.2%)	44 (21.1%)	53%												
アメリカ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 2px;">Market year</div> 冬小麦: 播種(9月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												54 (6.7%)	22 (10.8%)	42%												
カナダ 	冬小麦: 播種(9月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												35 (4.4%)	27 (13.1%)	77%												
オーストラリア 	冬小麦: 播種(11月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												34 (4.3%)	25 (12.1%)	73%												
パキスタン 	冬小麦: 播種(11月) → 収穫(5月) 春小麦: 播種(3月) → 収穫(7月)												31 (3.9%)	1 (0.2%)	2%												

資料: AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「Crop Calendars」、 「PS&D」 (2025.5)

注: 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他: 188 (23.6%) 輸出量: 60 (29.2%)

主要生産国のクロープカレンダー(米)

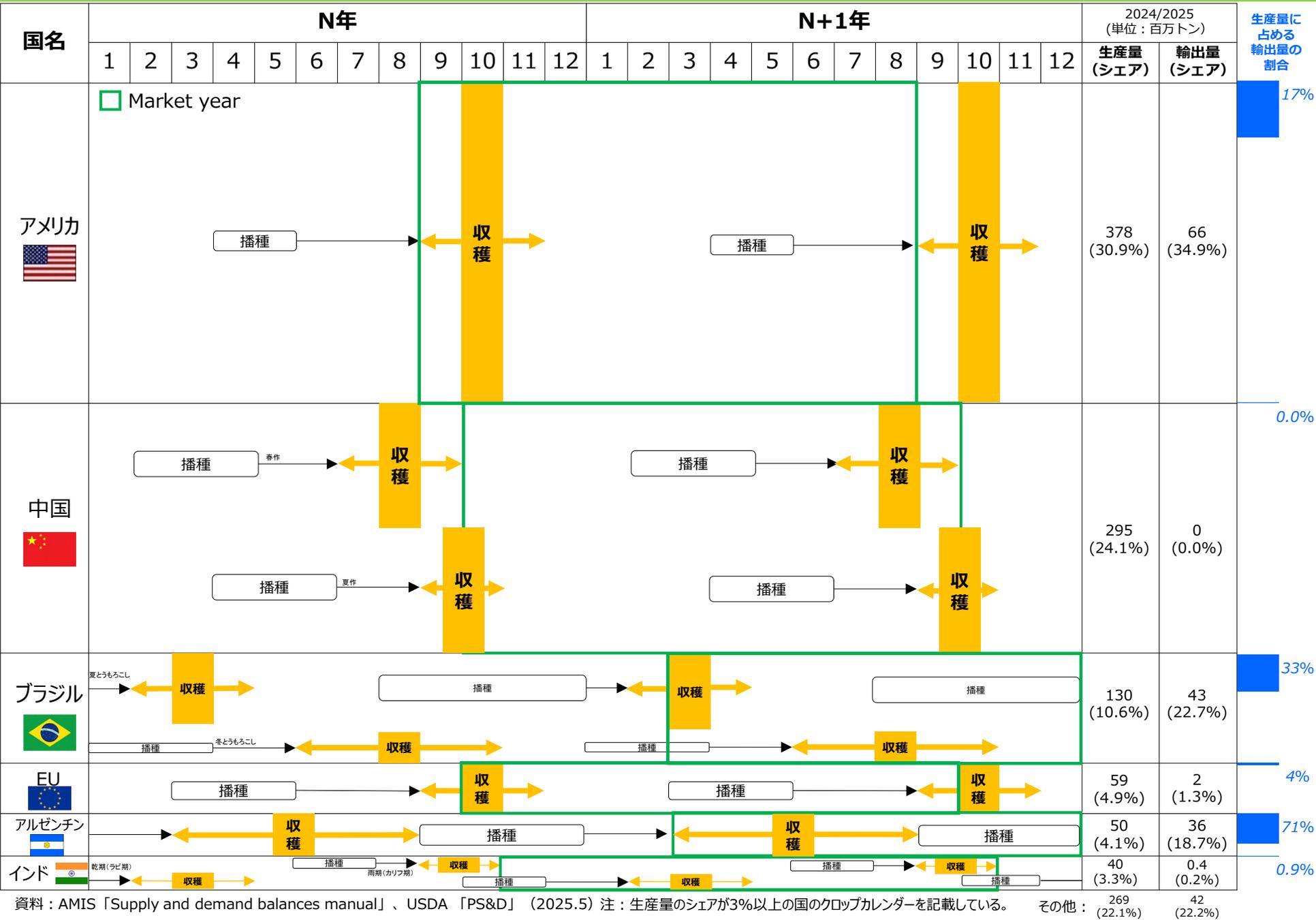
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位:百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
インド 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year 雨季(カリフ期) 播種 → 収穫 乾季(ラビ期) 播種 ← 収穫 </div>												147 (27.3%)	25 (39.9%)	17%												
中国 	南部二期作 一期目 播種 → 収穫 北部 一期作 播種 → 収穫 南部二期作 二期目 播種 → 収穫												145 (27.0%)	1 (1.5%)	0.6%												
バングラデシュ 	播種(アマン種) → 収穫 播種(アラス種) → 収穫 播種(ホロ種) → 収穫												37 (6.8%)	0 (0.0%)	0.0%												
インドネシア 	二期作 一期目 播種 → 収穫 二期作 二期目 播種 → 収穫												35 (6.4%)	0 (0%)	0.0%												
ベトナム 	播種 冬春作 → 収穫 播種 夏秋作 → 収穫 播種 冬作 → 収穫												27 (5.0%)	8 (12.9%)	29%												
タイ 	播種 雨季作 → 収穫 播種 乾季作 → 収穫												21 (3.8%)	7 (11.4%)	34%												

資料: AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「Crop Calendar」、PS&D (2025.5) 注: 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他: 127 (23.6%) 21 (34.4%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

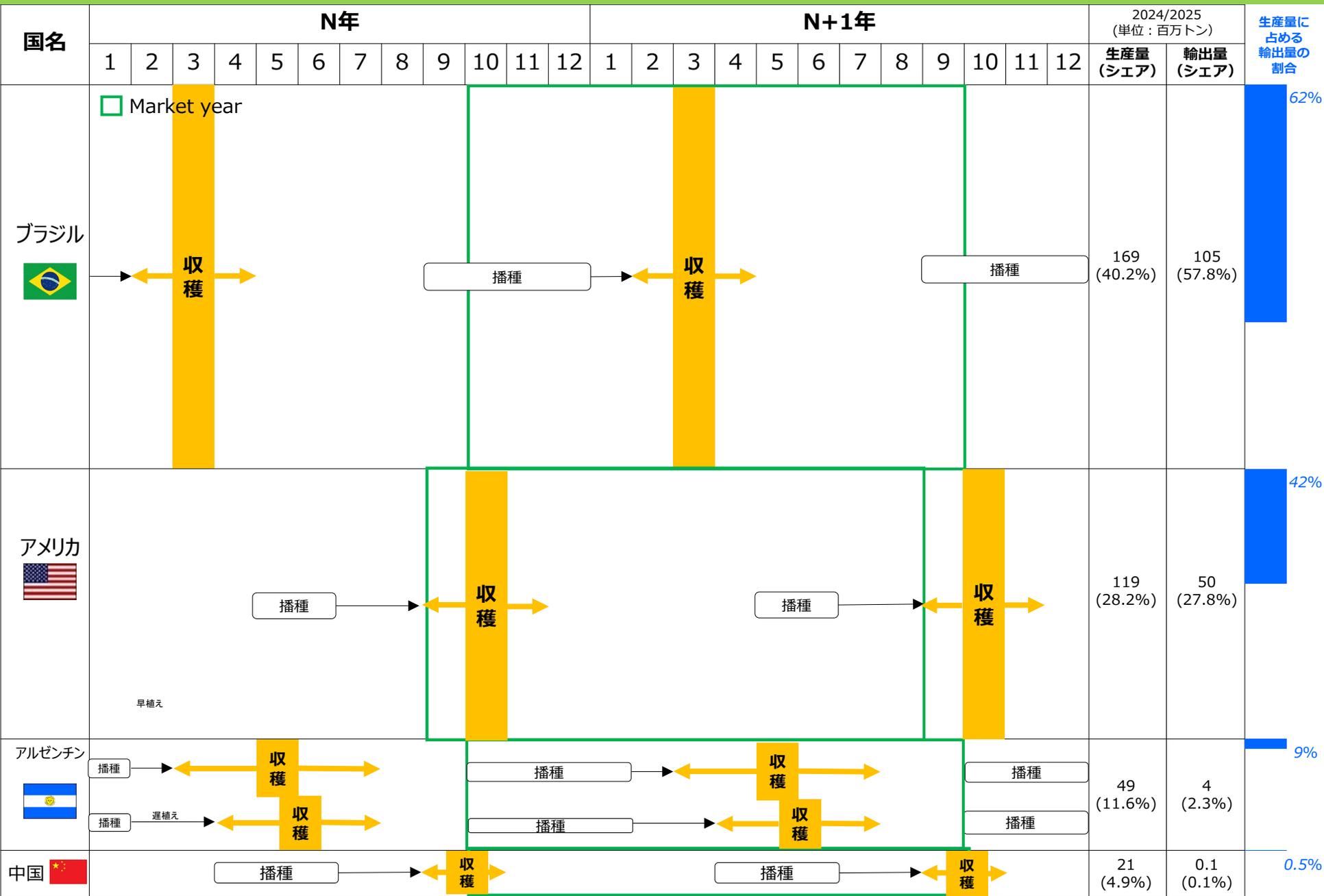
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」(2025.5) 注：生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他：269 (22.1%) 42 (22.2%)

主要生産国のクロープカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料: AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」(2025.5) 注: 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他: 63 (15.1%) 22 (12.0%)

主要生産国のクロープカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位：百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量(シェア)	輸出量(シェア)	
カナダ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> </div>												19 (22.1%)	9 (46.7%)	47%												
EU 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> ← 収穫 → 播種 </div> <div style="text-align: center;"> ← 収穫 → 播種 </div> </div>												17 (19.8%)	0.3 (1.6%)	2%												
中国 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> ← 収穫 → </div> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> <div style="text-align: center;"> 播種 </div> </div>												16 (18.6%)	0 (0.0%)	0.0%												
インド 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> ← 収穫 → </div> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> <div style="text-align: center;"> 播種 </div> </div>												12 (13.5%)	0 (0.0%)	0.0%												
オーストラリア 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> </div>												6 (7.0%)	5 (25.9%)	82%												
ロシア 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> </div>												5 (5.5%)	1 (4.5%)	18%												
ウクライナ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> ← 収穫 → </div> <div style="text-align: center;"> 播種 → ← 収穫 </div> <div style="text-align: center;"> 播種 </div> </div>												4 (4.5%)	3 (17.2%)	85%												

資料：USDA「Crop Calendar」、IPS&D (2025.5)

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：(9.1%)
(4.1%)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関(各国政府機関、FAO、IGC等)の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2026 年2月中旬までに発表した情報を引用しています(最新年度 2025/26 年度です)。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

<https://www.usda.gov/about-usda/reports-and-data/agency-reports>

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表:<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>

・食品の価格動向:<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>

・米に関するマンスリーレポート:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所):<https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報(ALICの情報サイト):<https://www.alic.go.jp/>

・砂糖、でんぷん:<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>

・野菜:<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>

・畜産物:<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO):<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会(IGC):<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業・水産業分野):<https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム(AMIS):<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA):<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB):<https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC):<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES):<http://www.agriculture.gov.au/abares>

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注:同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○ 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL:03-6744-2368(直通)

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10年先）、超長期（30年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

